

2.2.6 動物プランクトン

動物プランクトン調査については、令和2年5月25日(春季調査)、令和2年8月6日(夏季調査)、令和2年11月16日(秋季調査)、令和3年1月13日(冬季調査)に実施した。調査地点は図2.1.1(1)に示すとおりである。

(1) 調査結果

動物プランクトンの季節別出現状況を表2.2.7、季節変化を図2.2.19、水平分布を図2.2.20に示す。

動物プランクトンの各季の総出現種類数は32~49種類の範囲にあり、夏季に多く、秋季から冬季にかけて少なかった。各季とも調査地点間の大きな差はみられなかった。

平均出現個体数は、22,996~138,785個体/m³の範囲にあり、春季から夏季にかけて多かった。

平均沈殿量は4.53~135.85mL/m³の範囲にあり、春季及び秋季に少なかった。

主な出現種は、内湾等で普通にみられるカイアシ目のノープリウス幼生が四季を通して優占したほか、春季にはホソスナカラムシ、夏季及び秋季にはパラカラヌス属、オイトナ属、冬季にはマイクロセテラ ノルヴェジカが主な出現種であった。

水平分布をみると、個体数は調査地点間の大きな差はみられず、ほぼ一様であった。

表 2.2.7 動物プランクトンの季節別出現状況

| 項目/調査時期 | 令和2年5月25日 (春季:9点) | 令和2年8月6日 (夏季:9点) | 令和2年11月16日 (秋季:9点) | 令和3年1月13日 (冬季:9点) |
|------------------------------------|--|--|---|--|
| 総出現種類数 | 39 | 49 | 32 | 34 |
| 平均出現種類数 (範囲) | 26 20 ~ 31 | 30 25 ~ 33 | 16 10 ~ 19 | 16 13 ~ 22 |
| 平均出現個体数 (範囲:個体/m ³) | 94,369 64,389 ~ 118,275 | 138,785 72,324 ~ 179,784 | 53,692 22,401 ~ 109,171 | 22,996 12,057 ~ 48,091 |
| 平均沈殿量 (範囲:mL/m ³) | 6.33 4.01 ~ 8.70 | 135.85 100.96 ~ 177.27 | 4.53 1.75 ~ 7.80 | 17.39 6.14 ~ 28.33 |
| 主な出現種 平均個体数 (組成比・%) | カイアシ目のノープリウス幼生 25,044 (26.5) ホソスナカラムシ 23,578 (25.0) | カイアシ目のノープリウス幼生 35,472(25.6) パラカラヌス属 19,802(14.3) オイトナ属 14,303(10.3) | カイアシ目のノープリウス幼生 13,943 (26.0) パラカラヌス属 12,424 (23.1) オイトナ属 6,473 (12.1) | カイアシ目のノープリウス幼生 7,274 (31.6) マイクロセテラ ノルヴェジカ 3,260 (14.2) |

注1) 主な出現種は各地点での平均出現個体数の上位5種(但し10%以上)を示す。

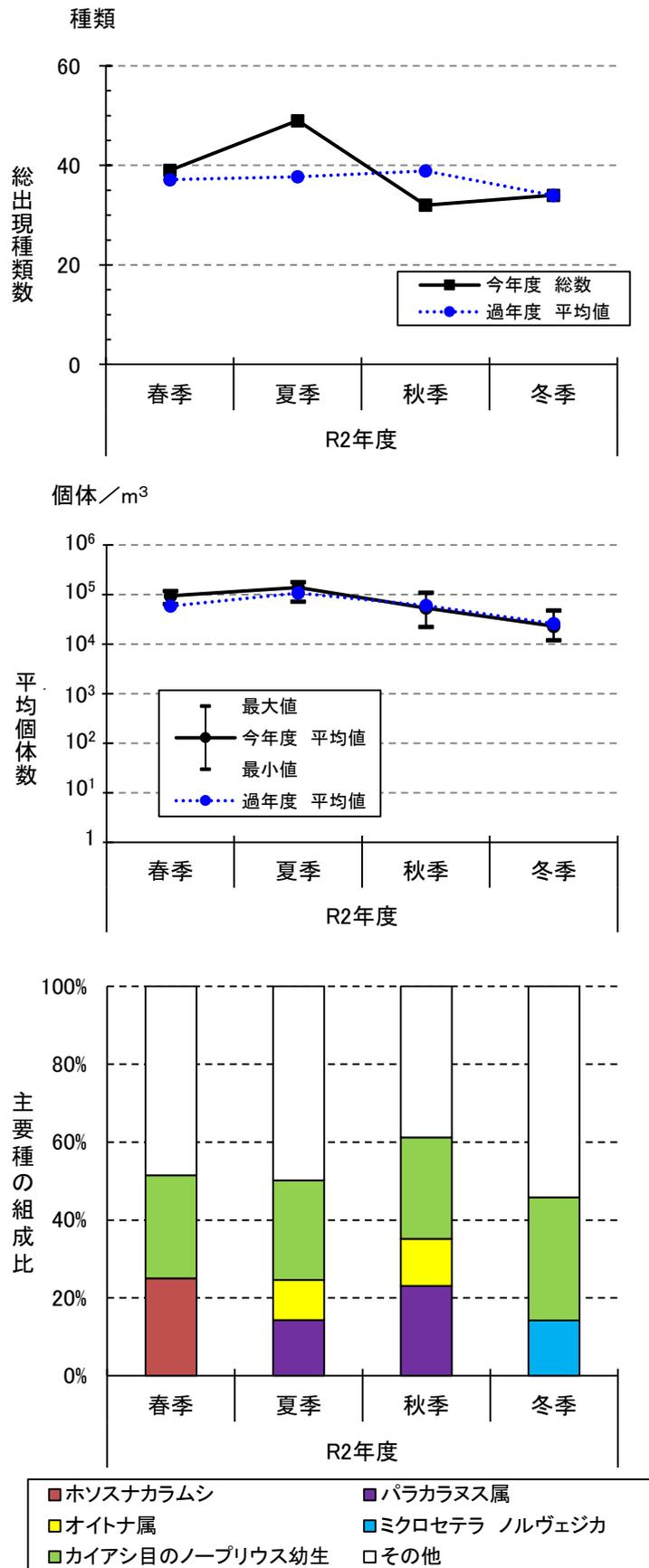


図 2.2.19 季節別出現状況図（動物プランクトン）

調査年月日：令和2年5月25日（春季）
 調査方法：北原式定量ネット鉛直曳き

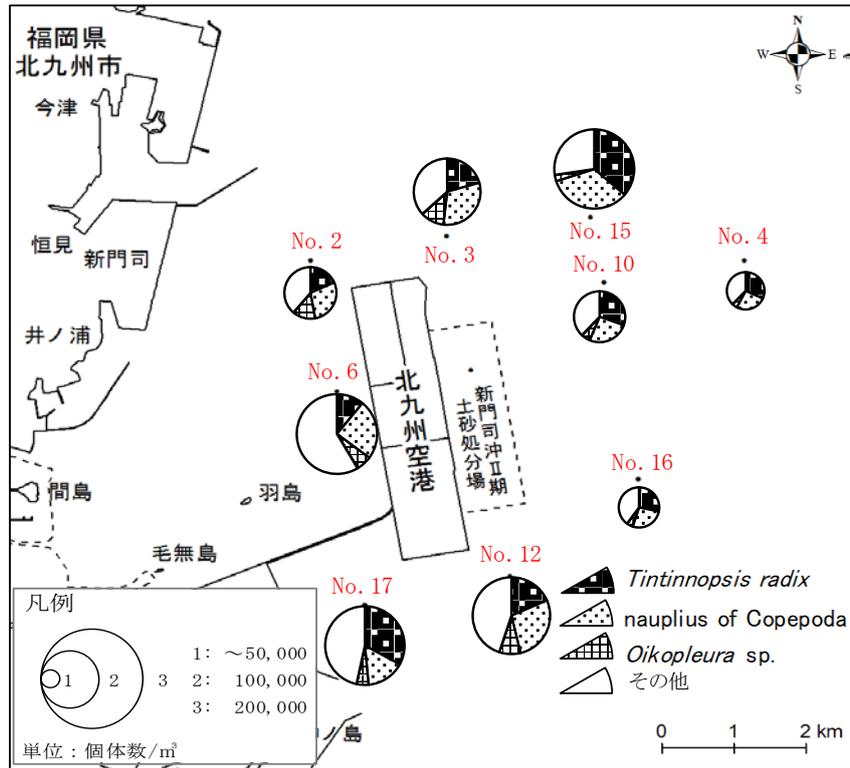


図 2.2.20(1) 動物プランクトンの水平分布（令和2年度春季）

調査年月日：令和2年8月6日（夏季）
 調査方法：北原式定量ネット鉛直曳き

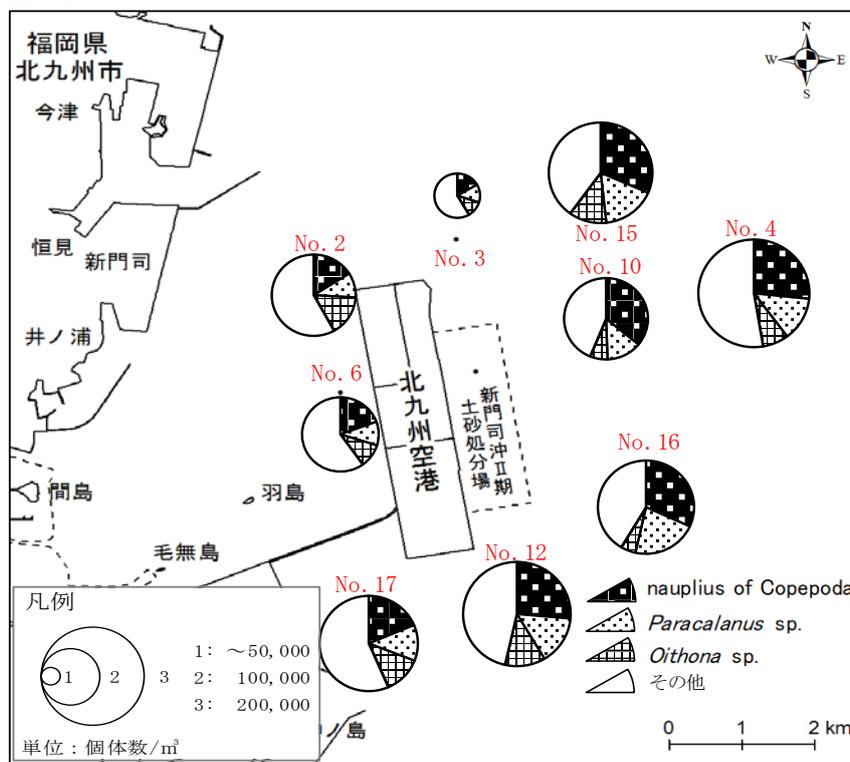


図 2.2.20(2) 動物プランクトンの水平分布（令和2年度夏季）

主な出現種（個体数）

調査期日：令和2年11月16日（秋季）
調査方法：北原式定量ネット鉛直曳き

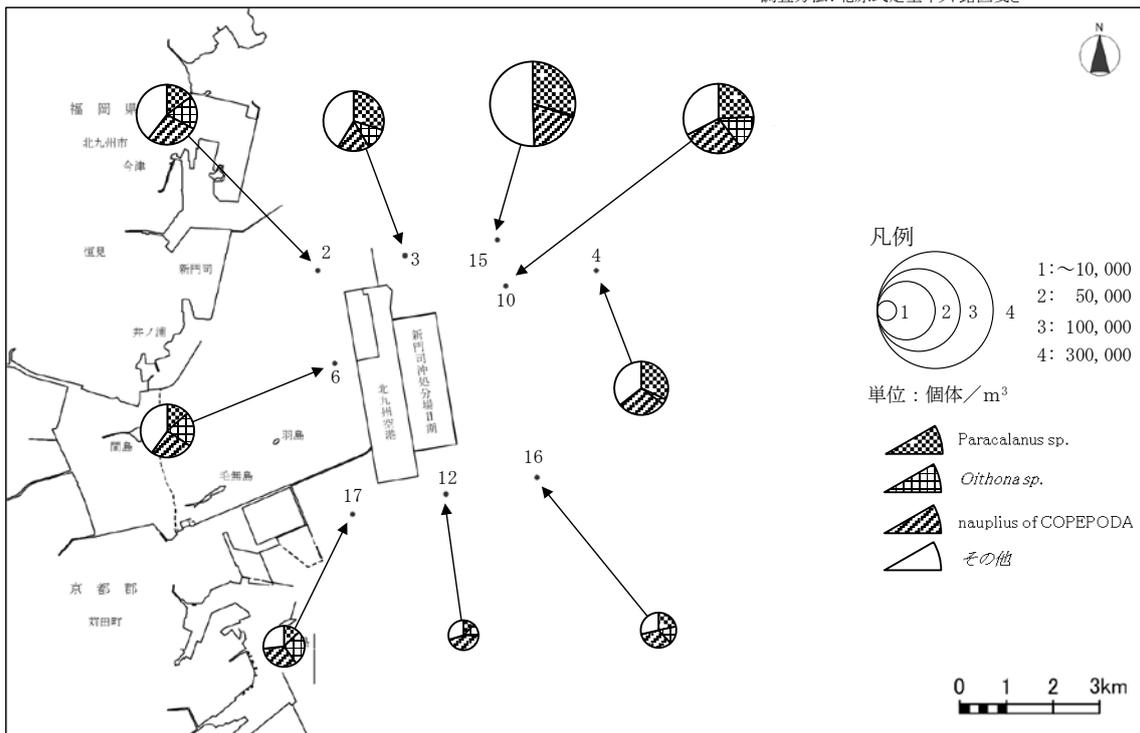


図 2. 2. 20(3) 動物プランクトンの水平分布（令和2年度秋季）

主な出現種（個体数）

調査期日：令和3年1月13日（冬季）
調査方法：北原式定量ネット鉛直曳き

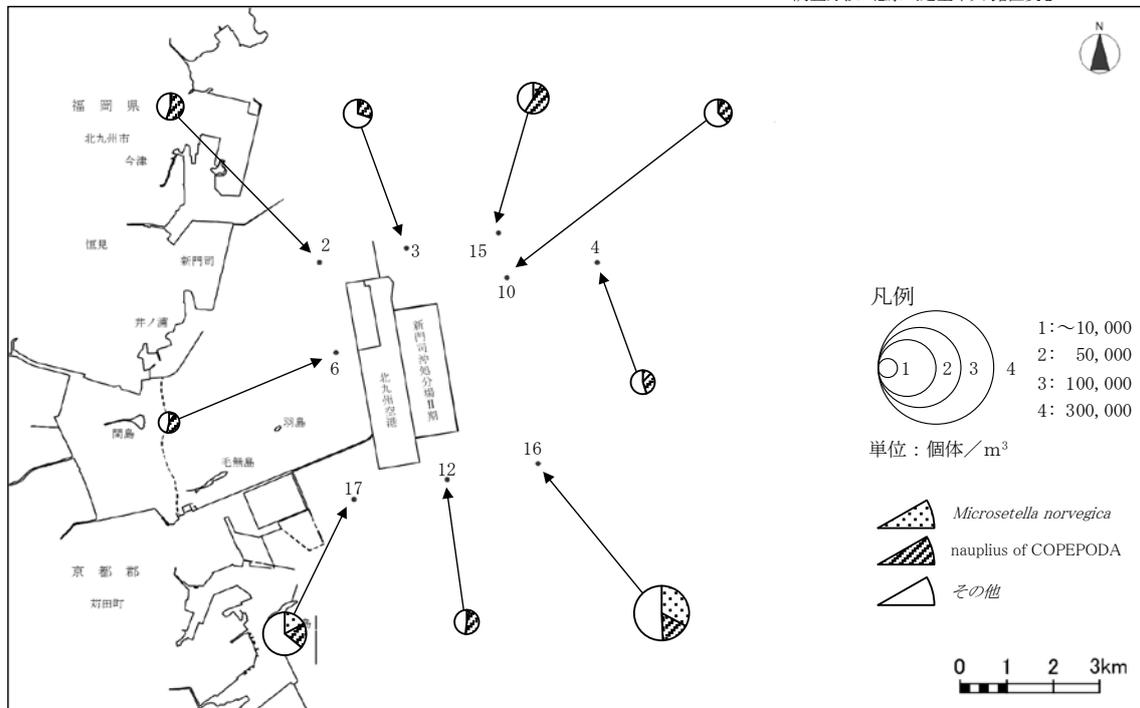


図 2. 2. 20(4) 動物プランクトンの水平分布（令和2年度冬季）

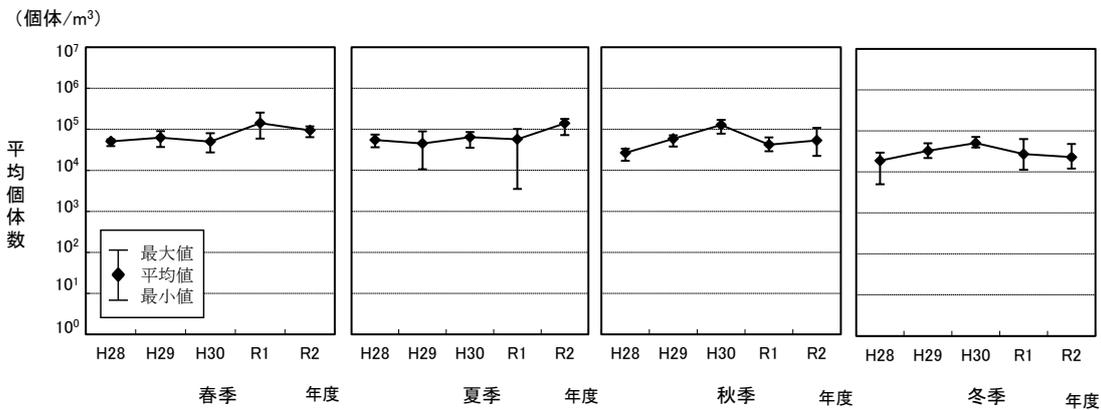
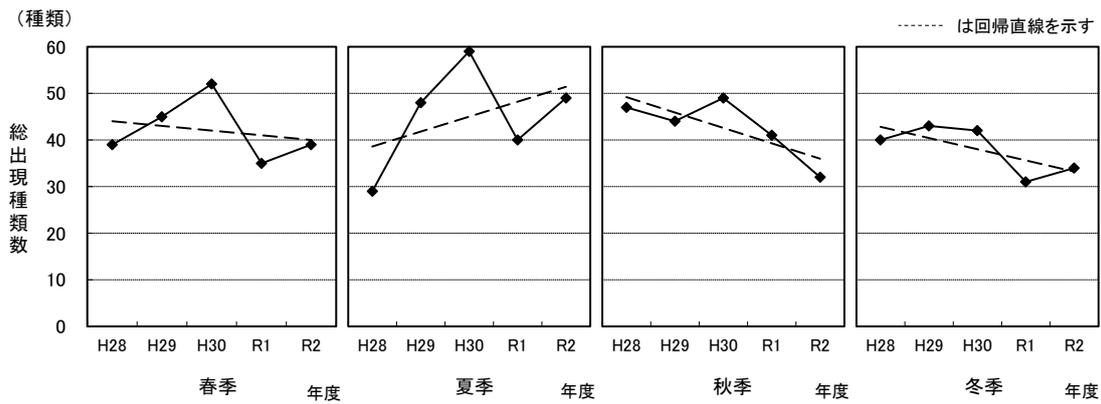
(2) 評価

動物プランクトンの総出現種類数及び平均個体数の経年変化（全調査地点平均）を図 2.2.21に、主な出現種の経年変化を図 2.2.22に示す。但し、平成28年度の春季、夏季は5地点の平均を、平成28年度の秋季、冬季は10地点、平成29年度以降は9地点の平均値を示している。

令和2年度の種類数は夏季に多く、秋季から冬季にかけて少なかった。個体数は春季から夏季にかけて多かった。主な出現種はカイアシ目のノープリウス幼生やパラカラヌス属、オイトナ属などであった。

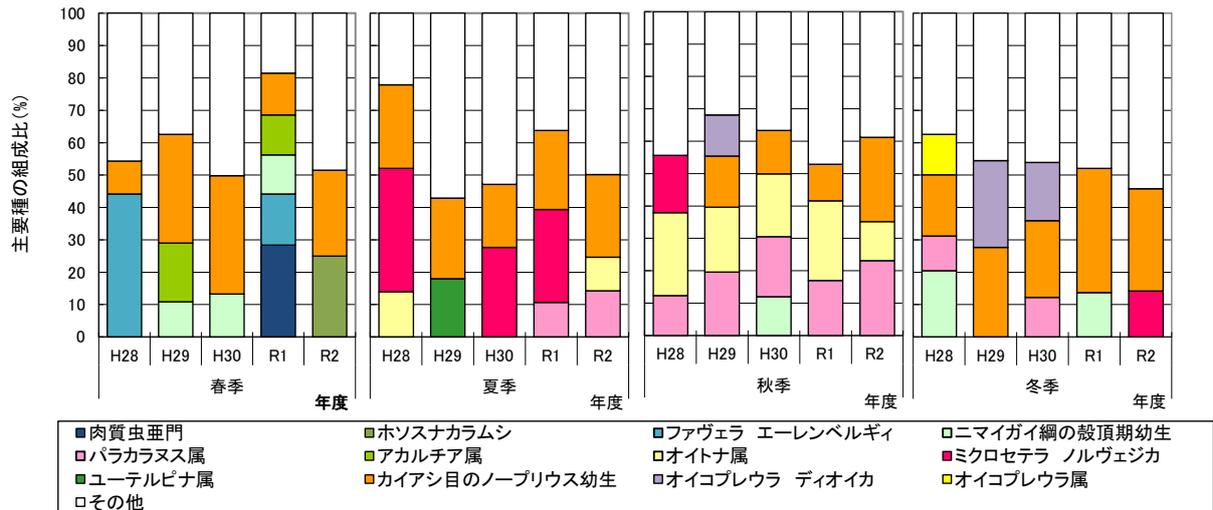
最近5ヶ年間の傾向をみると、種類数は夏季に増加傾向、春季、秋季及び冬季は減少傾向もしくは横ばい状態にあった。個体数は春季及び夏季に増加傾向、秋季及び冬季は横ばい状態にあった。

主な出現種についてみると、カイアシ目のノープリウス幼生が優占する頻度が高かった。季節的な傾向をみると、春季はアカルチア属、ファヴェラ エーレンベルギィ、夏季はマイクロセテラ ノルヴェジカ、秋季はパラカラヌス属やオイトナ属、冬季はオイクプレウラ属やニマイガイ綱の殻頂期幼生等の優占率が高くなっていた。季節的な変動はみられるものの、主な出現種として出現する種は概ね同様であり、令和2年度の出現種も過年度と概ね同様な傾向であったが、春季ではホソスナカラムシが多く出現した。



※平成 28 年度の春季、夏季は 5 地点の平均を、平成 28 年度の秋季、冬季は 10 地点、平成 29 年度以降は 9 地点の平均値を示す。

図 2.2.21 動物プランクトンの経年変化



※各季を過去 5 年間で集計し、優占種（個体数比率 10%以上）として出現回数が多かった上位 5 種を抽出した。

図 2.2.22 主な出現種の経年変化（動物プランクトン）

2.2.7 魚卵・稚仔魚

魚卵・稚仔魚調査については、令和2年5月25日(春季調査)、令和2年8月6日(夏季調査)、令和2年11月16日(秋季調査)、令和3年1月13日(冬季調査)に実施した。調査地点は図2.1.1(1)に示すとおりである。

(1) 調査結果

1) 魚卵

魚卵の季節別出現状況を表2.2.8、季節変化を図2.2.23、水平分布を図2.2.24に示す。

魚卵の各季の総出現種類数は、1～10種類の範囲にあり、春季・夏季にかけて多く、冬季に少なかった。

平均出現個数は、春季が最も多く(36,084個/1,000m³)、秋季に少なかった(34個/1,000m³)。

主な出現種は、春季、秋季にはカタクチイワシやネズッコ科、冬季にはイシガレイであった。

浮遊卵を産出する魚類の多くは、水温が上昇する春～夏にかけて産卵することから、秋～冬季はほとんど出現がみられず、令和2年度の結果は内湾域における一般的な季節変化を示していると考えられる。

水平分布をみると、春季は空港島南東側のNo.16で、冬季は空港島東側のNo.4、No.10、No.15、No.16で多く、その他の季節では調査地点間の大きな差はみられず、ほぼ一様であった。

表 2.2.8 魚卵の季節別出現状況

| 項目/調査時期 | 令和2年5月25日 (春季:9点) | 令和2年8月6日 (夏季:9点) | 令和2年11月16日 (秋季:9点) | 令和3年1月13日 (冬季:9点) |
|--|---|----------------------------------|--|----------------------|
| 総出現種類数 | 8 | 10 | 4 | 1 |
| 平均出現種類数 (範囲) | 5 (4 ~ 7) | 6 (4 ~ 9) | 2 (1 ~ 3) | 1 (0 ~ 1) |
| 平均出現個数 (範囲:個/1,000m ³) | 36,084 (5,661 ~ 131,531) | 11,029 (6,212 ~ 21,579) | 34 (4 ~ 123) | 118 (0 ~ 358) |
| 主な出現種と その平均個数 (個/1,000m ³) ()内は組成比率(%) | カタクチイワシ 25,646 (71.1) 単脂卵 0.60-0.65mm 6,108 (16.9) | 単脂卵 0.60-0.68mm 10,099 (91.6) | カタクチイワシ 21 (61.2) ネズッコ科 12 (34.0) | イシガレイ 118 (100.0) |

注) 1, 主な出現種は平均出現個体数の上位5種(但し10%以上)を示す。
2, 不明卵には卵径範囲を示している。

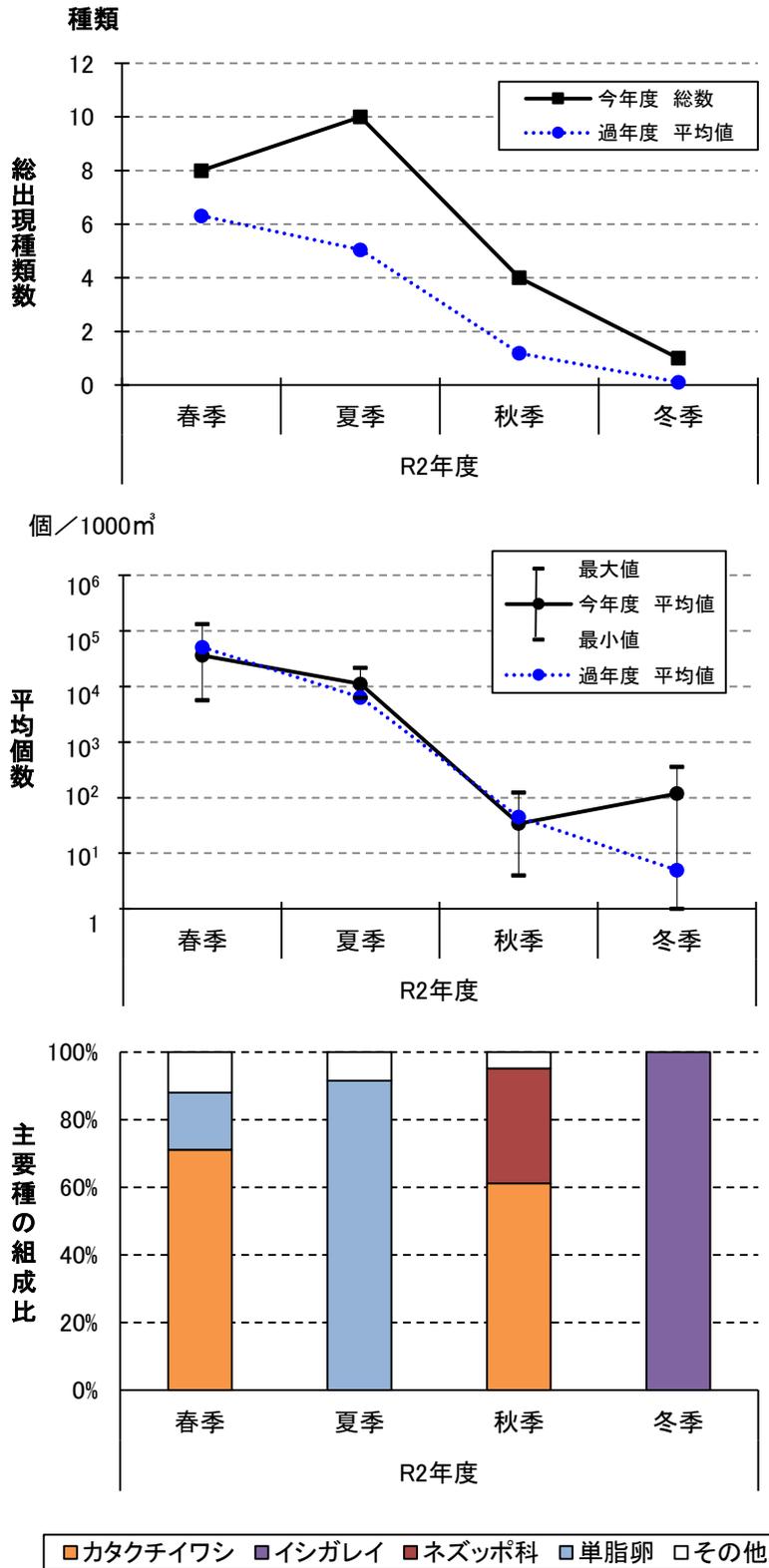


図 2.2.23 季節別出現状況図（魚卵）

調査年月日：令和2年5月25日（春季）
 調査方法：まるちネット水平曳き(2ノット 10分間)

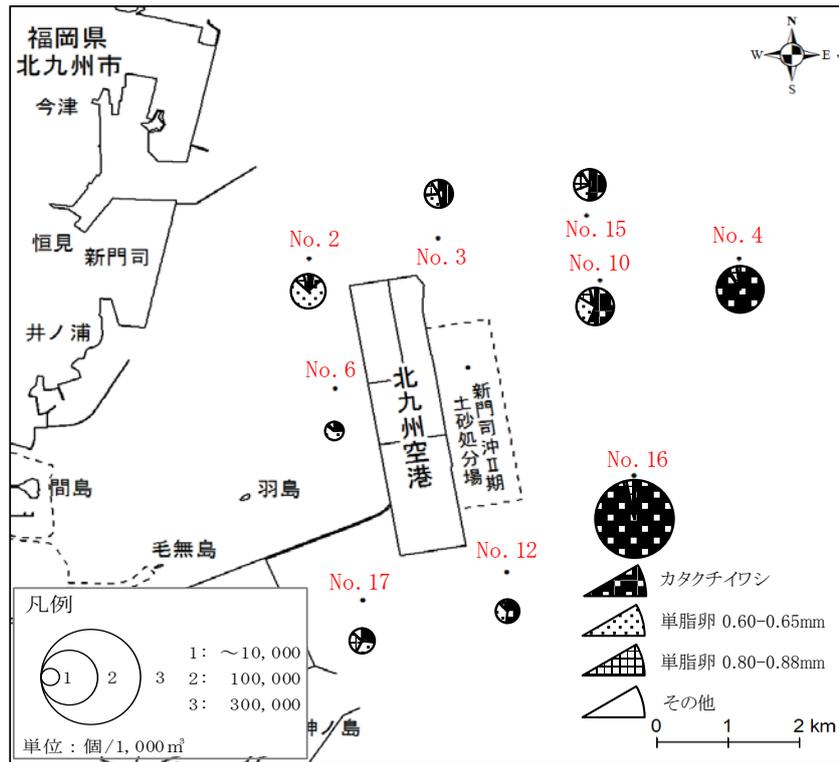


図 2.2.24(1) 魚卵の水平分布（令和2年度春季）

調査年月日：令和2年8月6日（夏季）
 調査方法：まるちネット水平曳き(2ノット 10分間)

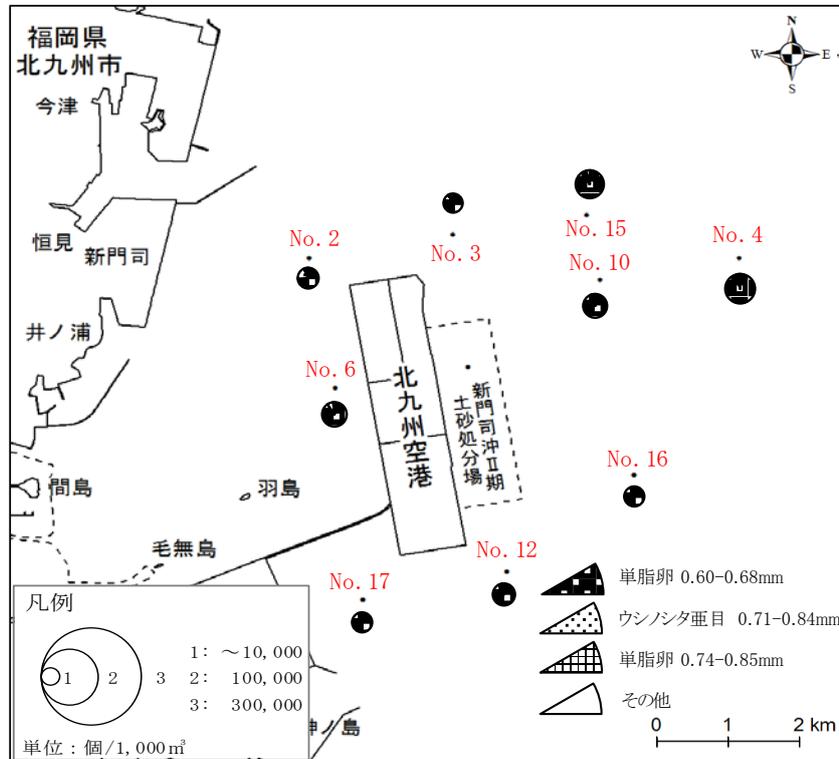


図 2.2.24(2) 魚卵の水平分布（令和2年度夏季）

主な出現種（個数）

調査期日：令和2年11月16日（秋季）
調査方法：まるちネット水平曳き（2ノット、10分間）

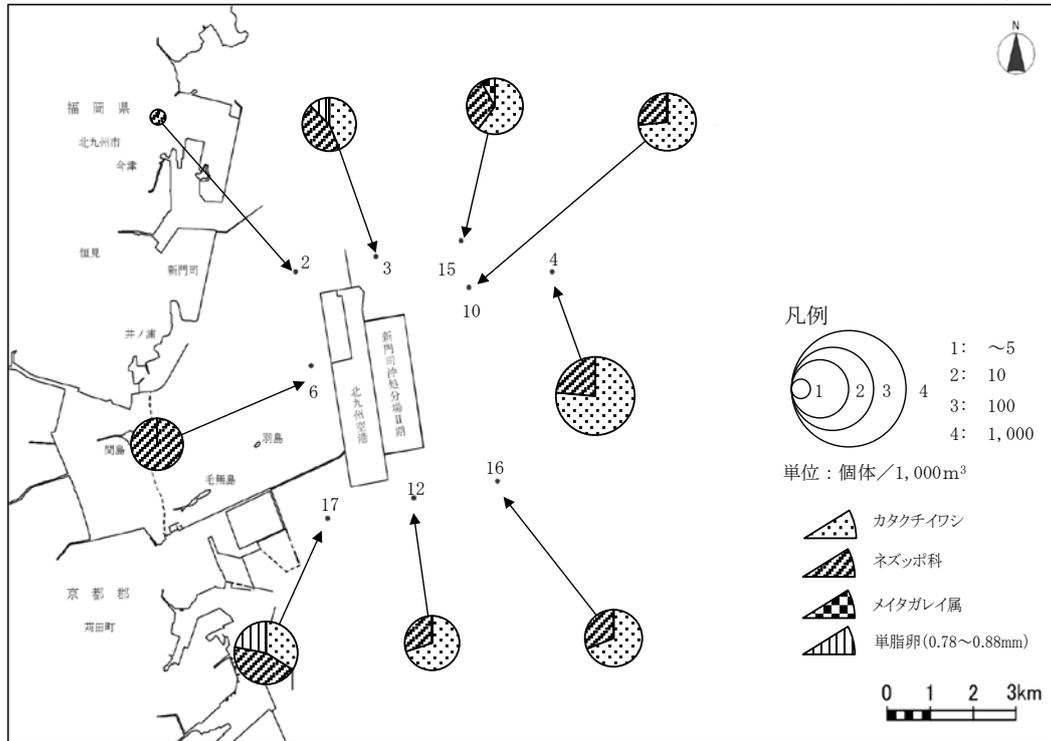


図 2. 2. 24(3) 魚卵の水平分布（令和2年度秋季）

主な出現種（個数）

調査期日：令和3年1月13日（冬季）
調査方法：まるちネット水平曳き（2ノット、10分間）

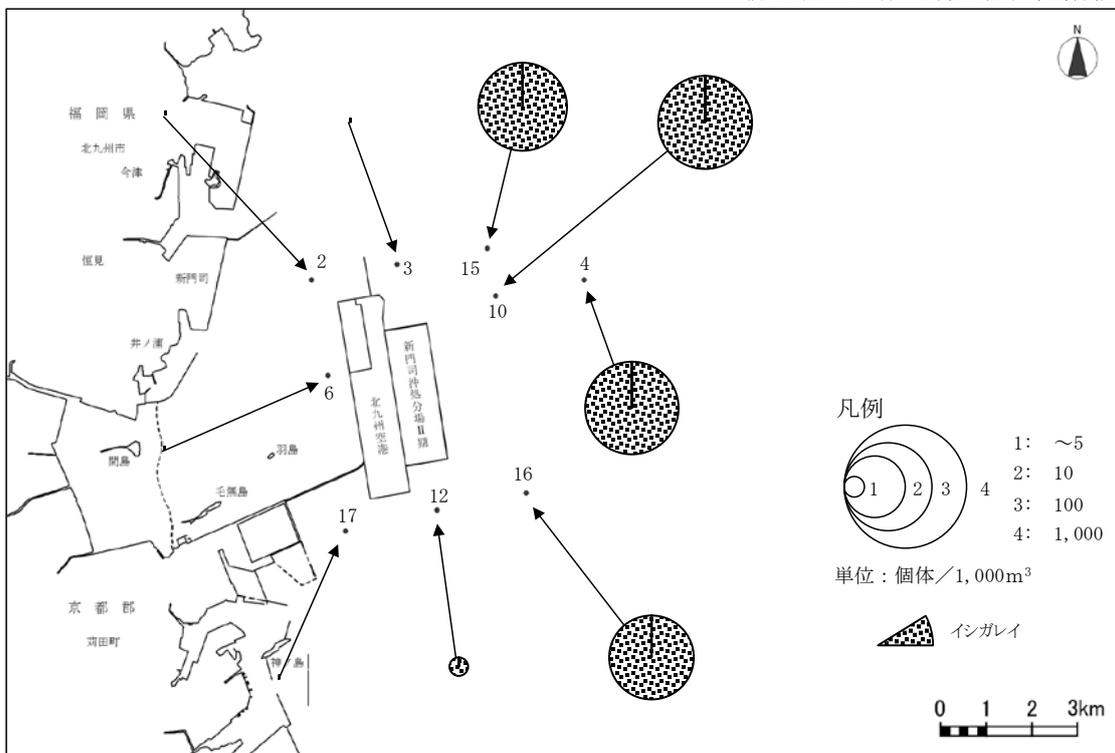


図 2. 2. 24(4) 魚卵の水平分布（令和2年度冬季）

2) 稚仔魚

稚仔魚の季節別出現状況を表 2.2.9、季節変化を図 2.2.25、水平分布を図 2.2.26 に示す。

稚仔魚の各季の総出現種類数は、5～26種類の範囲にあり、春季・夏季にかけて多く、秋季・冬季にかけて少なかった。

平均出現個体数は、15～527個体/1,000m³の範囲にあり、春季に最も多く、秋季に少なかった。

主な出現種は、春季、夏季はカタクチイワシやハゼ科、イソギンポ科、ナベカ属等で、秋季及び冬季はカサゴ、イソギンポ科、ネズツポ科、イシガレイ等であった。これらは、沿岸域や内湾域で普通に出現する種であり、それぞれ季節に応じた出現となっている（マハゼは1～5月、イシガレイは12～1月が産卵期、カサゴは11～3月が産仔期）ことから、調査時期による平均出現個体数の違いは、内湾域における一般的な季節変化を示していると考えられた。

水平分布をみると、調査地点間の大きな差はみられず、ほぼ一様であった。

表 2.2.9 稚仔魚の季節別出現状況

| 項目/調査時期 | 令和2年5月25日 (春季：9点) | 令和2年8月6日 (夏季：9点) | 令和2年11月16日 (秋季：9点) | 令和3年1月13日 (冬季：9点) |
|---|---|--|---|--|
| 総出現種類数 | 13 | 26 | 5 | 6 |
| 平均出現種類数 (範囲) | 8 (5 ～ 9) | 11 (4 ～ 22) | 1 (0 ～ 4) | 3 (1 ～ 4) |
| 平均出現個体数 (範囲：個体/1,000m ³) | 527 (75 ～ 1,897) | 108 (24 ～ 345) | 15 (0 ～ 95) | 109 (3 ～ 366) |
| 主な出現種と その平均個数 (個体/1,000m ³) ()内は組成比率(%) | ハゼ科 カタクチイワシ イソギンポ科 283 (53.8) 131 (24.8) 60 (11.4) | ナベカ属 イソギンポ科 テンジクダイ科 ハゼ科 28 (25.8) 19 (17.9) 18 (16.5) 13 (11.8) | カサゴ ネズツポ科 イソギンポ科 10 (66.4) 3 (17.6) 2 (13.0) | カサゴ イシガレイ マコガレイ 72 (65.7) 18 (16.1) 14 (12.5) |

注1) 主な出現種は平均出現個体数の上位5種（但し10%以上）を示す。

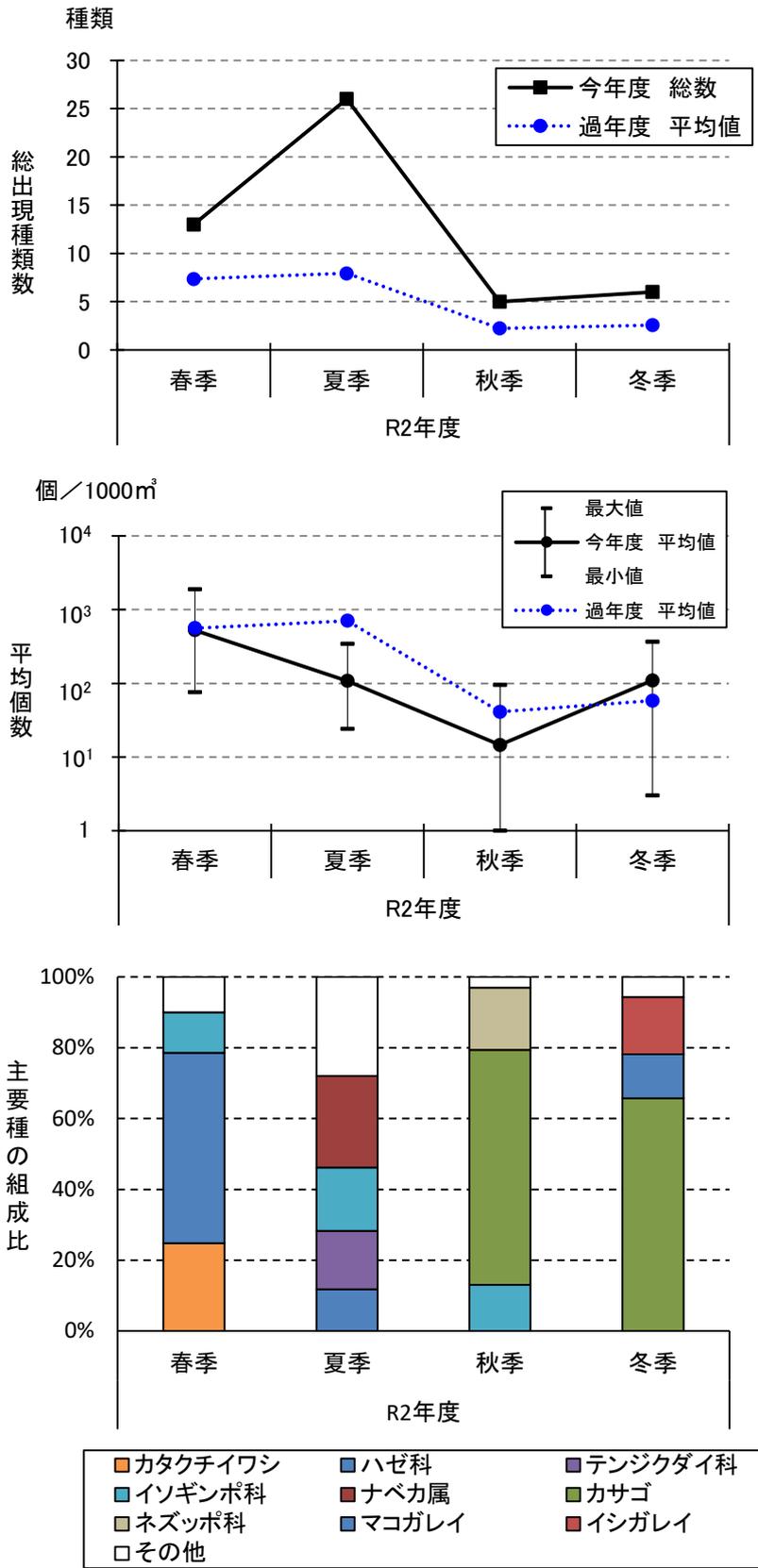


図 2.2.25 季節別出現状況図 (稚仔魚)

調査年月日: 令和2年5月25日(春季)
 調査方法: まるちネット水平曳き(2ノット 10分間)

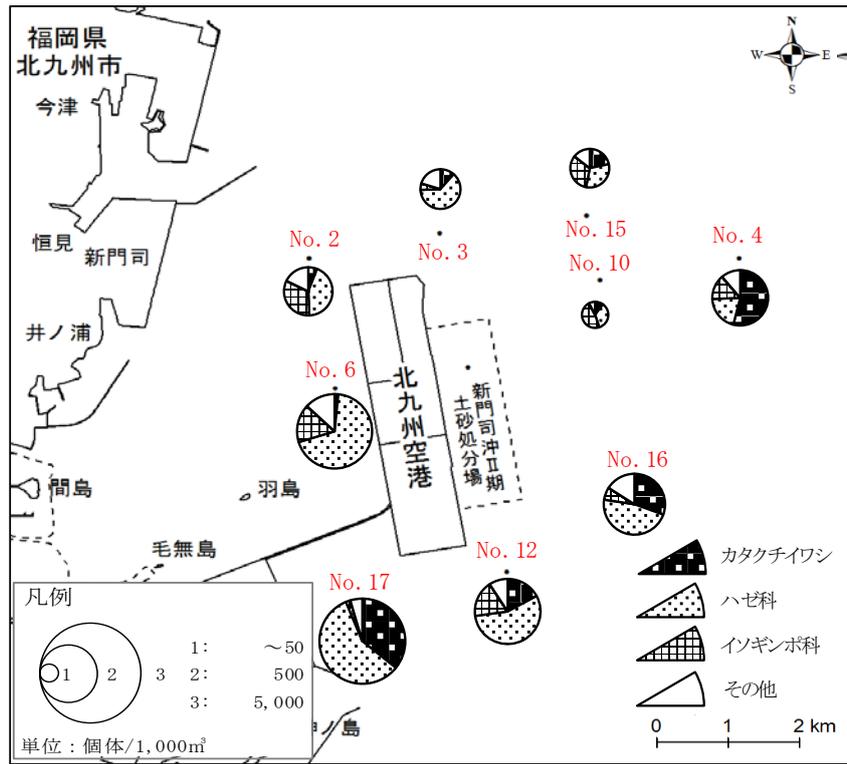


図 2.2.26(1) 稚仔魚の水平分布(令和2年度春季)

調査年月日: 令和2年8月6日(夏季)
 調査方法: まるちネット水平曳き(2ノット 10分間)

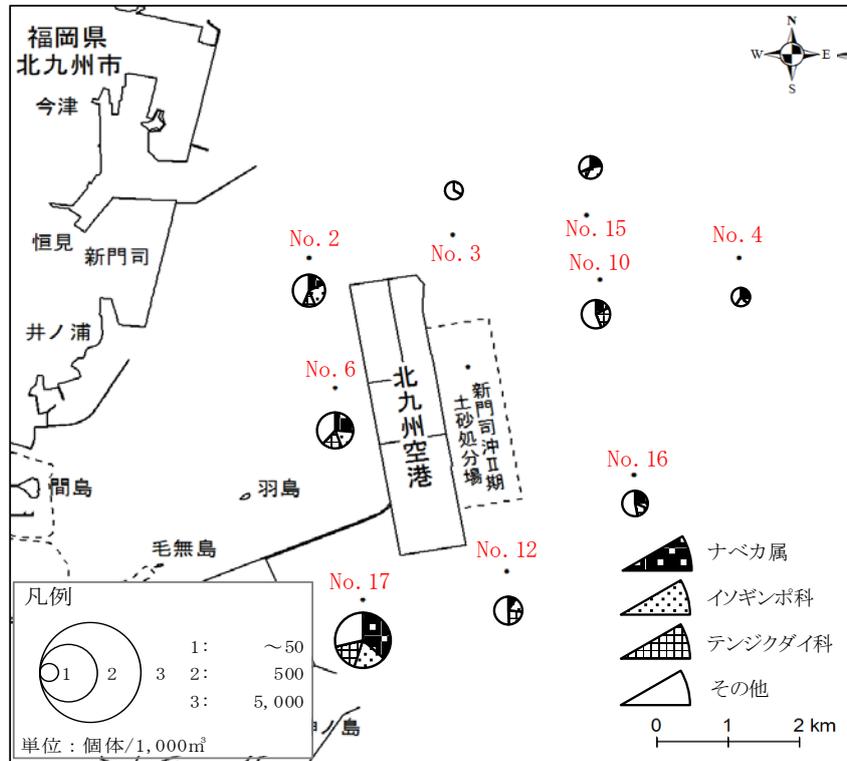


図 2.2.26(2) 稚仔魚の水平分布(令和2年度夏季)

主な出現種（個体数）

調査期日：令和2年11月16日（秋季）
調査方法：まるちネット水平曳き（2ノット、10分間）

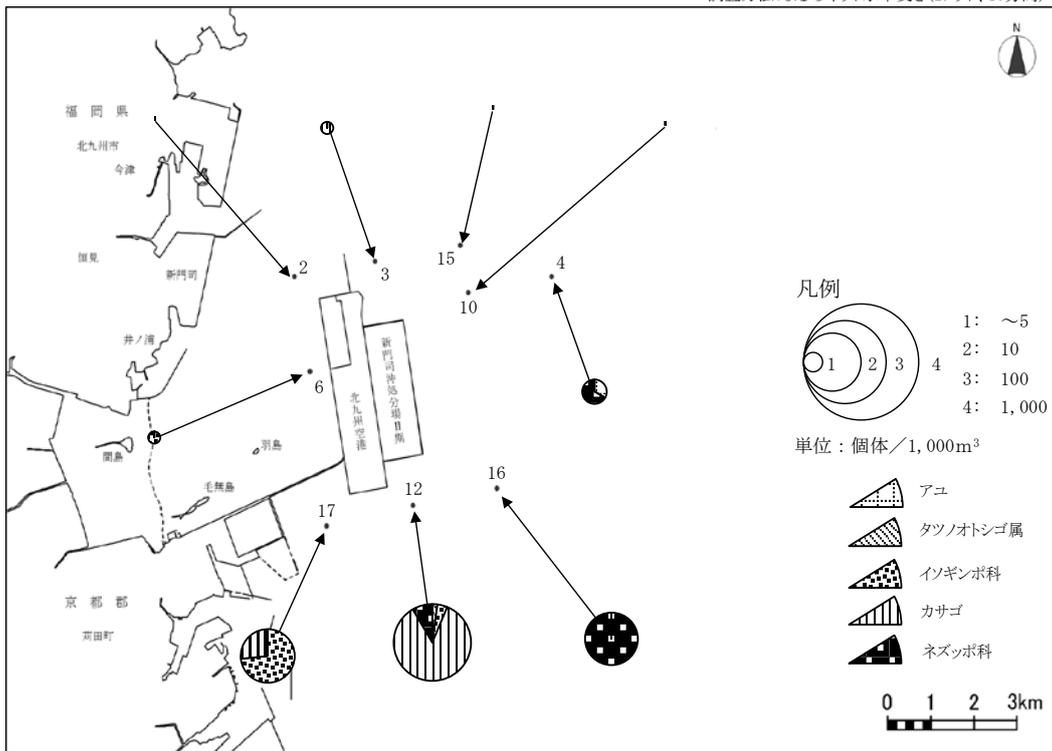


図 2.2.26(3) 稚仔魚の水平分布（令和2年度秋季）

主な出現種（個体数）

調査期日：令和3年1月13日（冬季）
調査方法：まるちネット水平曳き（2ノット、10分間）

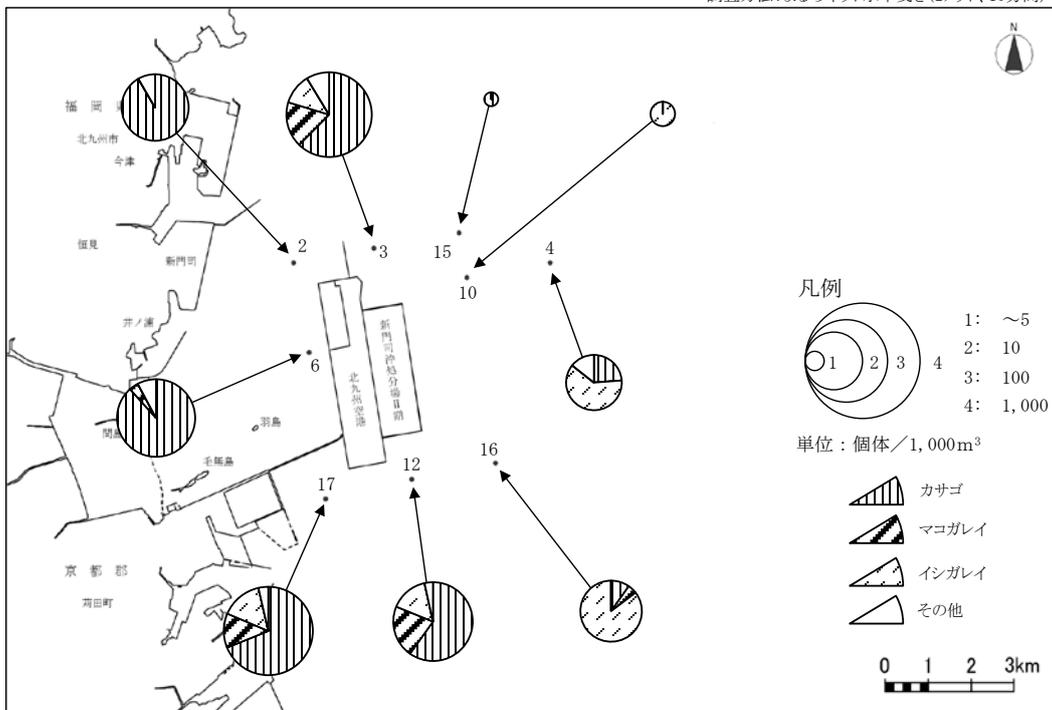


図 2.2.26(4) 稚仔魚の水平分布（令和2年度冬季）

(2) 評価

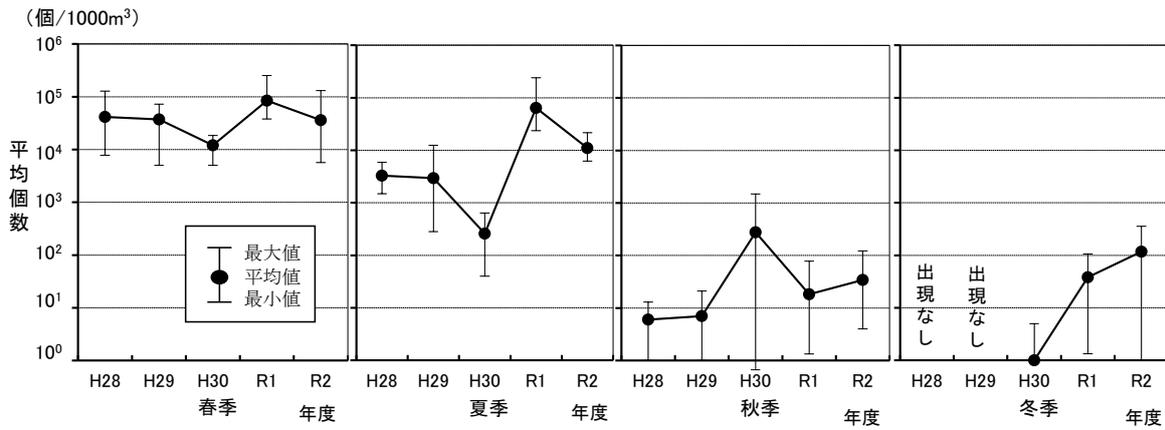
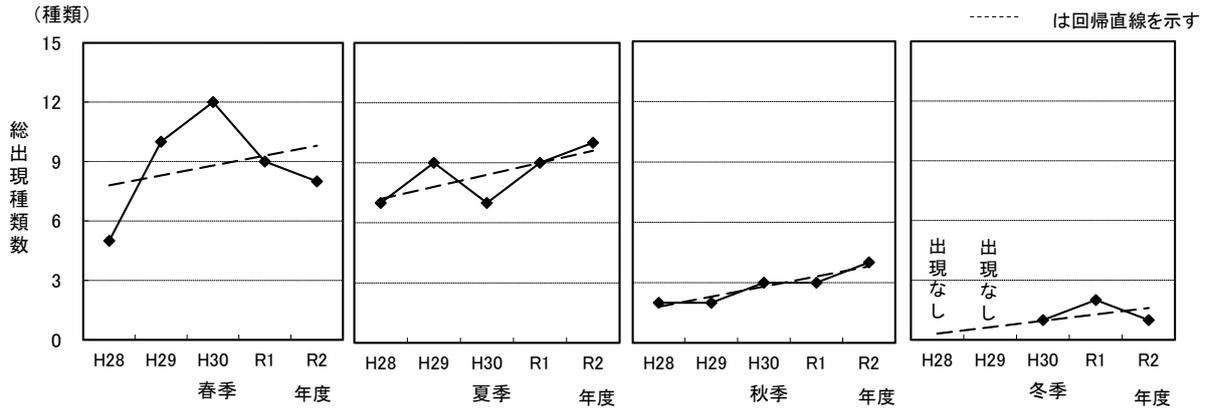
1) 魚卵

魚卵の総出現種類数及び平均個体数の最近5ヶ年間の経年変化（全調査点平均）を図 2.2.27に示した。但し、平成28年度は5地点、平成29年度以降は9地点の平均値を示している。

総出現種類数は0～12種類の範囲で推移し、春季及び夏季に多く、秋季及び冬季に少なかった。最近5ヶ年間では、いずれの季節も概ね増加傾向にあり、平成28年度や平成29年度の冬季は魚卵が出現しなかったが、近年はイシガレイ等の魚卵が出現する傾向にある。平均個体数も、種類数と同様、春季及び夏季に多く、秋季は少なく、冬季には平成30年以降増加傾向にある。最近5ヶ年間では、春季は概ね横ばい、夏季は平成30年度に減少し、その後は増加、秋季及び冬季は増加傾向であった。

最近5ヶ年間の主な出現種をみると、春季ではカタクチイワシ、種までの同定ができない単脂卵、夏季は単脂卵やカタクチイワシやウシノシタ亜目、秋季はカタクチイワシやネズッコ科が多く出現し、冬季は令和元年度以降、イシガレイが出現し始め、季節に応じた出現傾向がみられた。なお、これらの主な出現種は、いずれも内湾域で普通にみられる種類であった。

魚卵の出現種類数、平均個体数は季節変動が大きく、春季の出現が最も多く、夏季から冬季にかけて減少する傾向であった。これは、一般的な海域にみられる傾向であり、出現個数も過年度の変動範囲内で推移している。



※平成 28 年度は 5 地点の平均、平成 29 年度以降は 9 地点の平均値を示す。

図 2.2.27 魚卵の経年変化

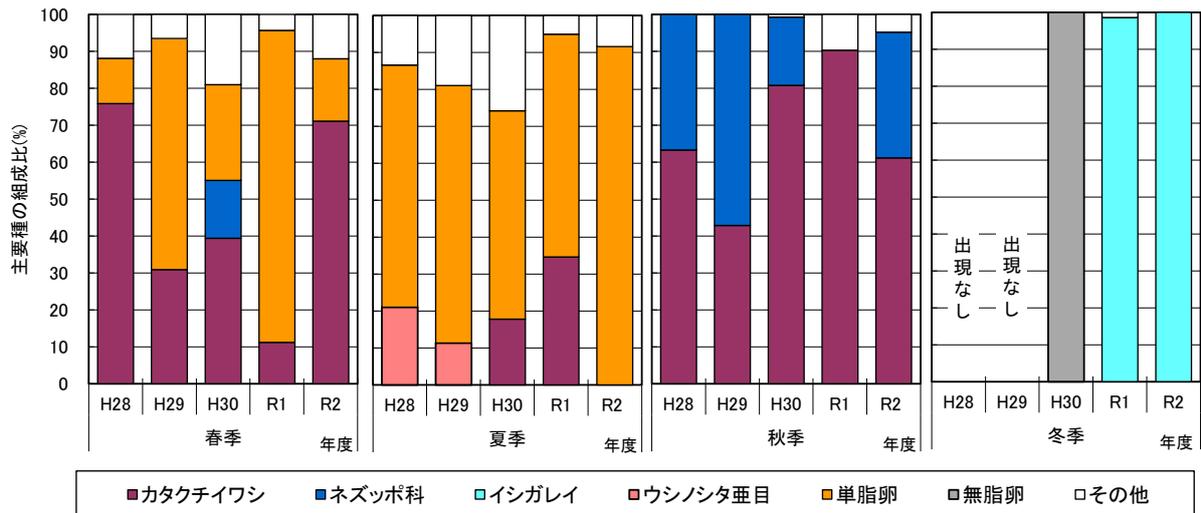


図 2.2.28 主な出現種の経年変化 (魚卵)

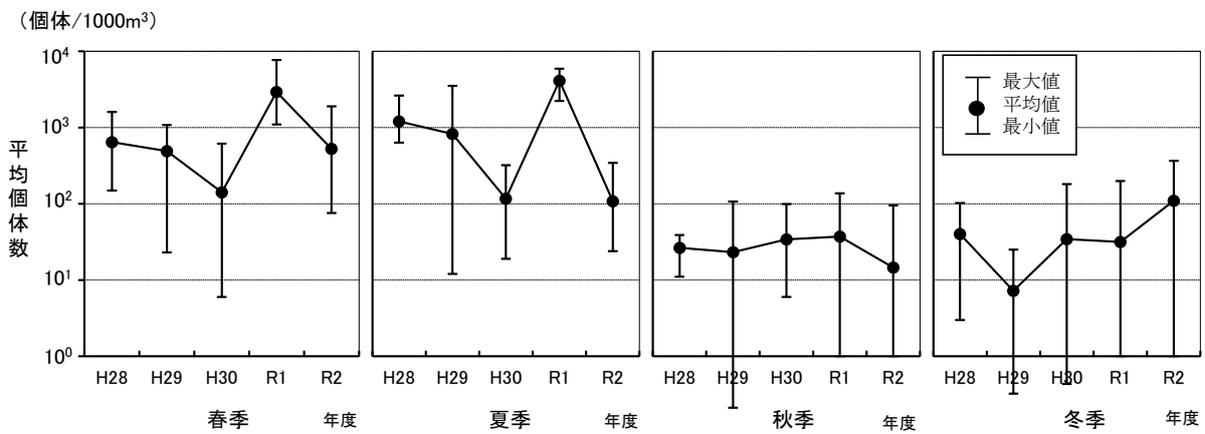
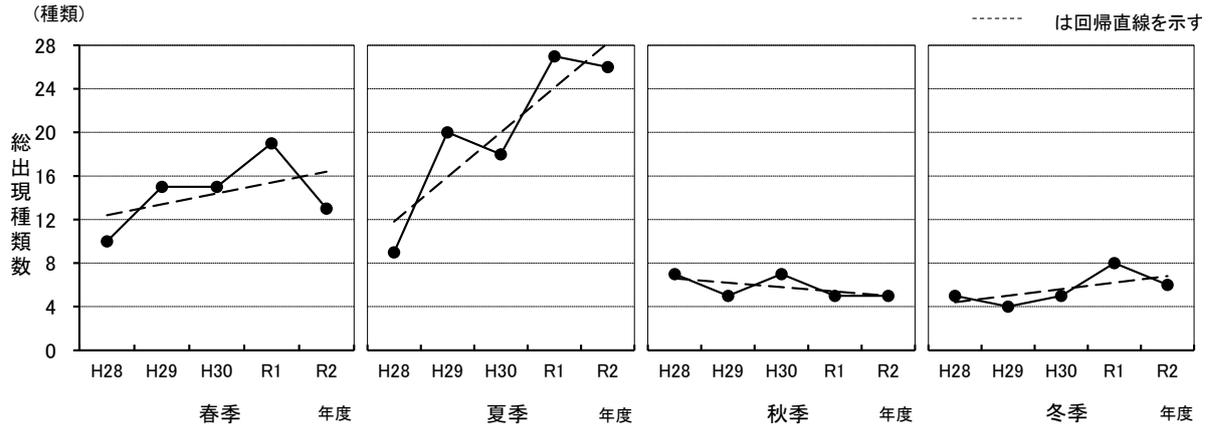
2) 稚仔魚

稚仔魚の総出現種類数及び平均個体数の最近5ヶ年間の経年変化（全調査地点平均）を図 2.2.29に示した。但し、平成28年度は5地点、平成29年度以降は9地点の平均値を示している。

総出現種類数は、4～27種類の範囲で推移し、春季及び夏季に多く、秋季及び冬季に少ない傾向を示した。最近5ヶ年間の季節毎の変化傾向をみると、春季及び夏季は増加傾向、秋季及び冬季は横ばい状態を示した。

平均個体数は、7～4,098個体/1000m³の範囲で推移し、春季と夏季に多い傾向を示した。各季とも調査年度によって変動が大きく、かつ調査地点間のばらつきも大きいため、明確な傾向はみられなかったが、経年的にみると令和2年度の結果は、いずれの季節も概ね過年度の変動の範囲内であった。

最近5ヶ年間の主な出現種をみると、調査年度によりやや違いはみられるものの、春季はハゼ科、カタクチイワシ、夏季はシロギス、ハゼ科、サツパ、秋季及び冬季はカサゴ等であった。これらの種はいずれも内湾で普通にみられる種類であった。令和2年度の結果は、過年度の季節変化と同様な傾向を示していた。



※平成 28 年度は 5 地点の平均、平成 29 年度以降は 9 地点の平均値を示す。

図 2.2.29 稚仔魚の経年変化

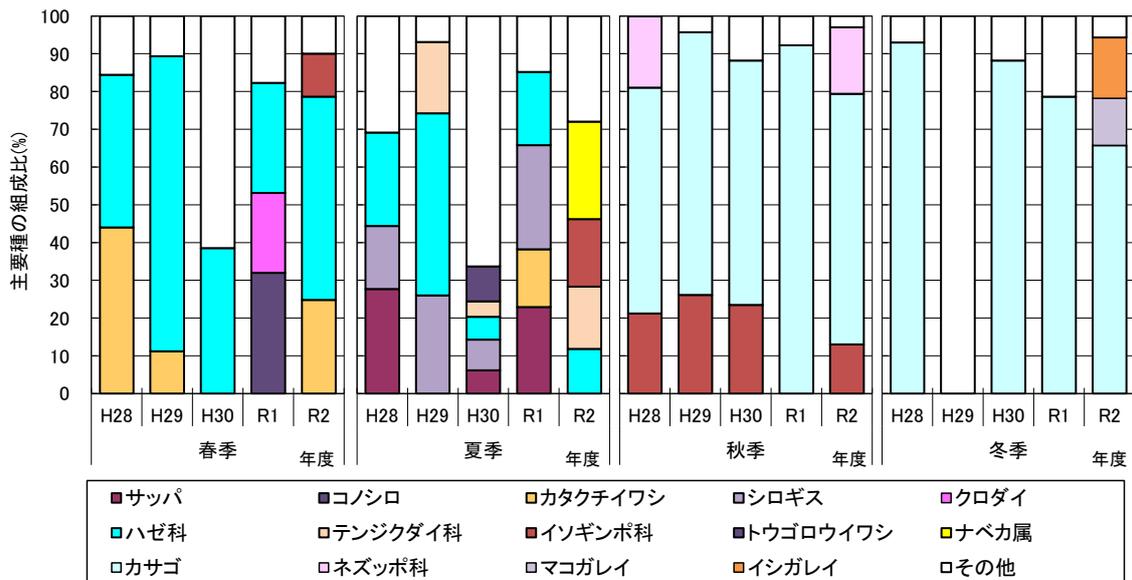


図 2.2.30 主な出現種の経年変化 (稚仔魚)

2.2.8 底生生物

底生生物調査については、令和2年5月26日(春季調査)、令和2年8月7日(夏季調査)、令和2年11月19日(秋季調査)、令和3年1月20日(冬季調査)に実施した。調査地点は図2.1.1(1)に示すとおりとした。

(1) 調査結果

底生生物の季節別出現状況を表2.2.10、図2.2.31、季節変化を図2.2.32、水平分布を図2.2.33に示す。

底生生物の総出現種類数は55～79種類の範囲にあり、冬季に多く、夏季及び秋季に少なかった。

平均出現個体数は、65～632個体/0.1m²の範囲にあり、春季に多く、夏季及び秋季に少なかった。

平均出現湿重量は、0.68～9.15g/0.1m²の範囲にあり、春季及び夏季に多く、秋季及び冬季に少なかった。

分類群別の個体数組成比をみると、春季、秋季及び冬季は軟体動物門の割合が高く、夏季は環形動物門の割合が高かった。

主な出現種は、個体数でみると、春季は軟体動物のシズクガイやケシトリガイ、夏季は環形動物のTharyx属やChaetozone属、秋季はヒメカノコアサリ、冬季はヒメカノコアサリやチヨノハナガイであった。

水平分布をみると、種類数、個体数ともに空港島西側のNo.6と空港島南東側のNo.16で少なく、その他の地点では調査地点間の大きな差はみられず、ほぼ一様であった。

表 2.2.10 底生生物の季節別出現状況

| 項目/調査時期 | 令和2年5月26日 (春季:9点) | 令和2年8月7日 (夏季:9点) | 令和2年11月19日 (秋季:9点) | 令和3年1月20日 (冬季:9点) |
|--|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 総出現種類数 | 73 | 59 | 55 | 79 |
| 平均出現種類数 (範囲) | 26 (11 ~ 40) | 20 (2 ~ 34) | 17 (6 ~ 29) | 22 (8 ~ 46) |
| 平均出現個体数 (個体/0.1m ²) (範囲) | 632 (38 ~ 1614) | 100 (2 ~ 238) | 65 (15 ~ 151) | 143 (16 ~ 586) |
| 平均出現湿重量 (g/0.1m ²) (範囲) | 9.15 (2.35 ~ 20.90) | 7.05 (1.17 ~ 24.80) | 0.68 (0.08 ~ 1.30) | 1.19 (0.32 ~ 3.13) |
| 個体数 組成比 (%) | 軟体動物門 | 74.8 | 10.3 | 66.0 |
| | 環形動物門 | 20.3 | 74.3 | 29.6 |
| | 節足動物門 | 2.0 | 2.8 | 2.9 |
| | その他 | 3.0 | 12.6 | 1.5 |
| 主な出現種と その平均出現個体数 (個体/0.1m ²) ()内は組成比率(%) | シズクガイ 313 (49.5) | Tharyx属 28 (27.9) | ヒメカノコアサリ 36 (54.8) | ヒメカノコアサリ 90 (62.6) |
| | ケシトリガイ 75 (11.8) | Chaetozone属 11 (10.7) | | チヨノハナガイ 16 (11.5) |
| 主な出現種と その平均出現湿重量 (g/0.1m ²) ()内は組成比率(%) | シズクガイ 3.77 (41.2) | ホトキスガイ 2.23 (31.6) | ヒメカノコアサリ 0.17 (25.0) | ヒメカノコアサリ 0.38 (31.9) |
| | チヨノハナガイ 0.96 (10.5) | | | チヨノハナガイ 0.21 (17.8) |
| | | | | シズクガイ 0.16 (13.6) |

注) 主な出現種は平均出現個体数の上位5種(但し10%以上)を示す。

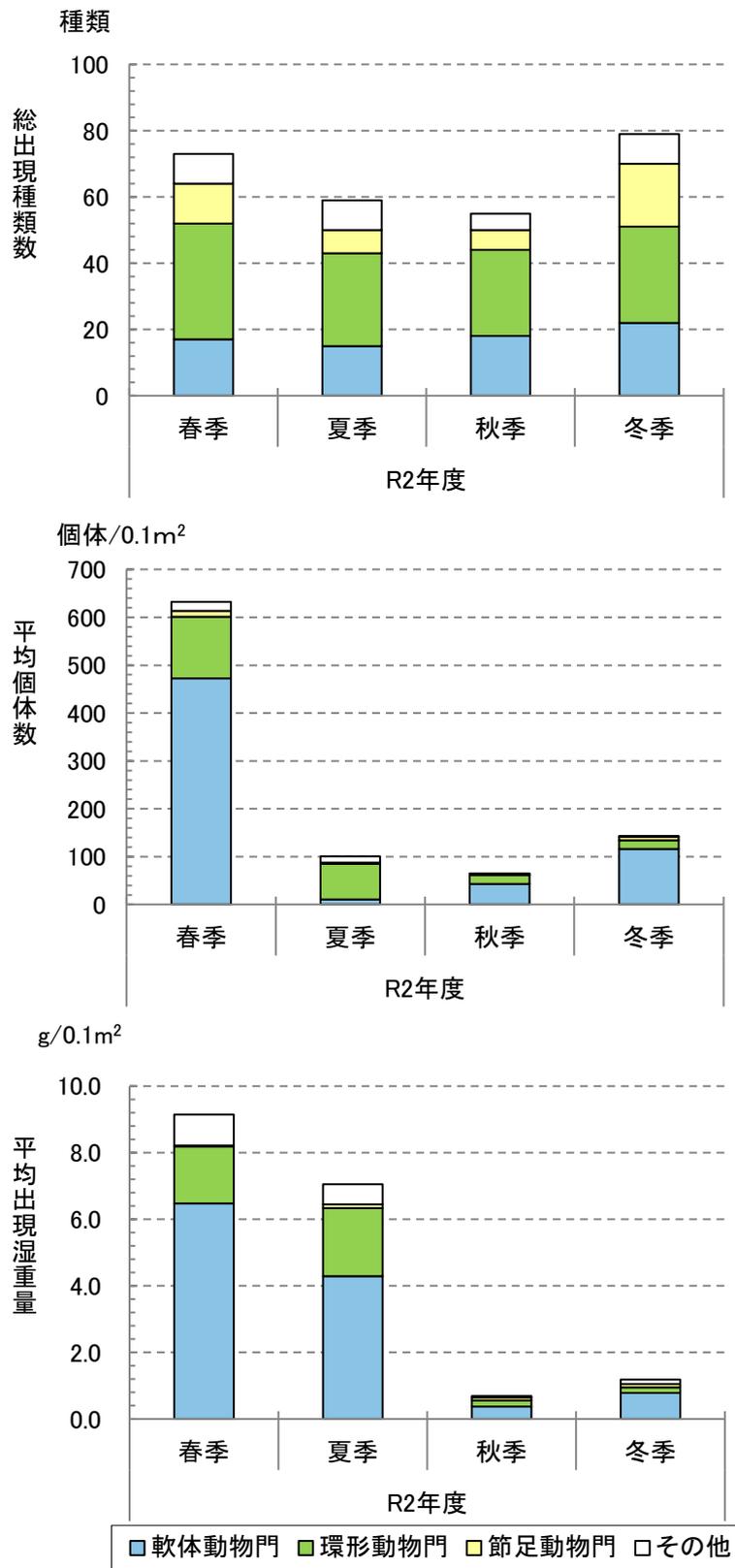


図 2.2.31 季節別出現状況図 (底生生物)

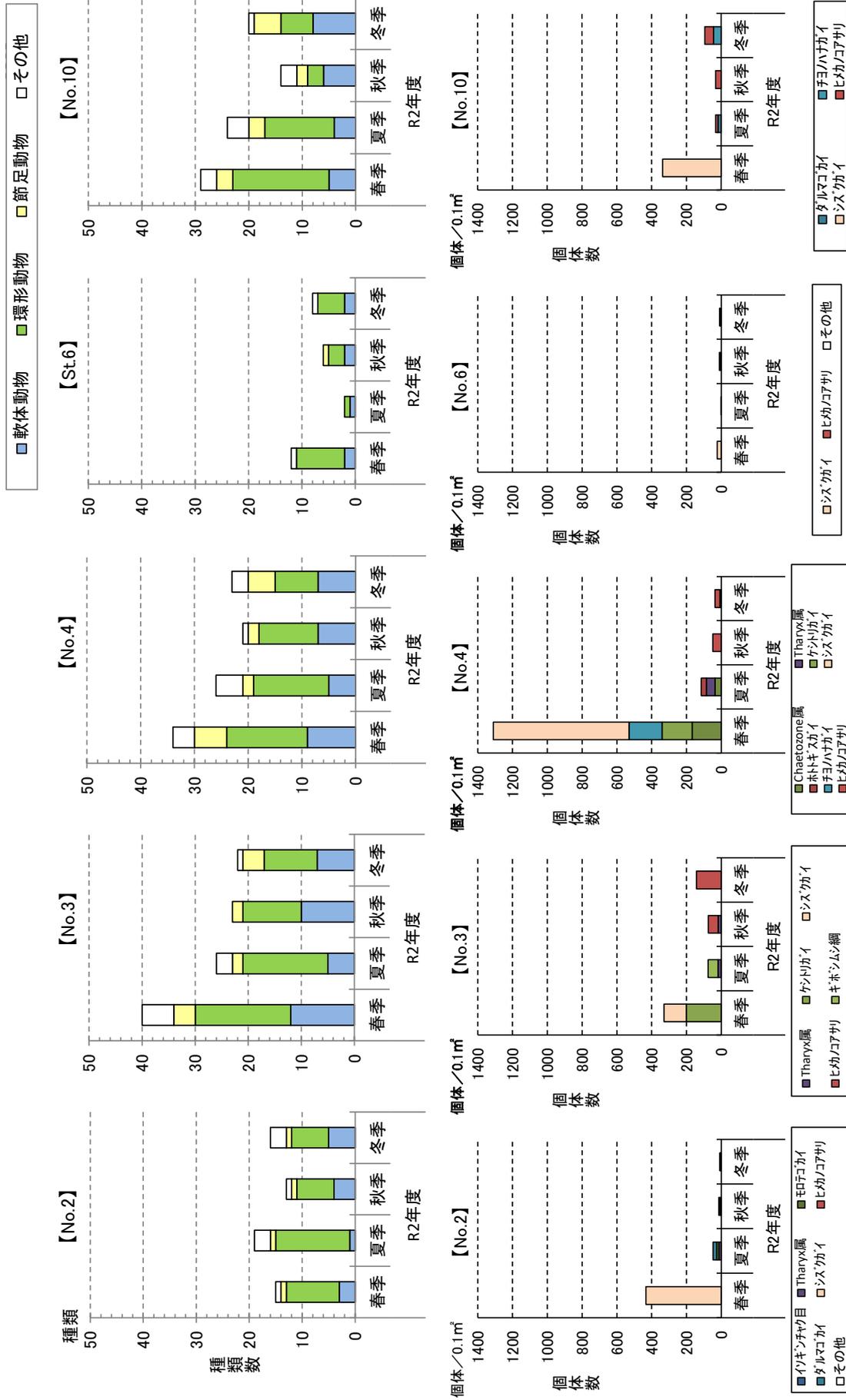


図 2.2.32(1) 底生生物の季節変化 (調査地点別)

■ 軟体動物 ■ 環形動物 ■ 節足動物 □ その他

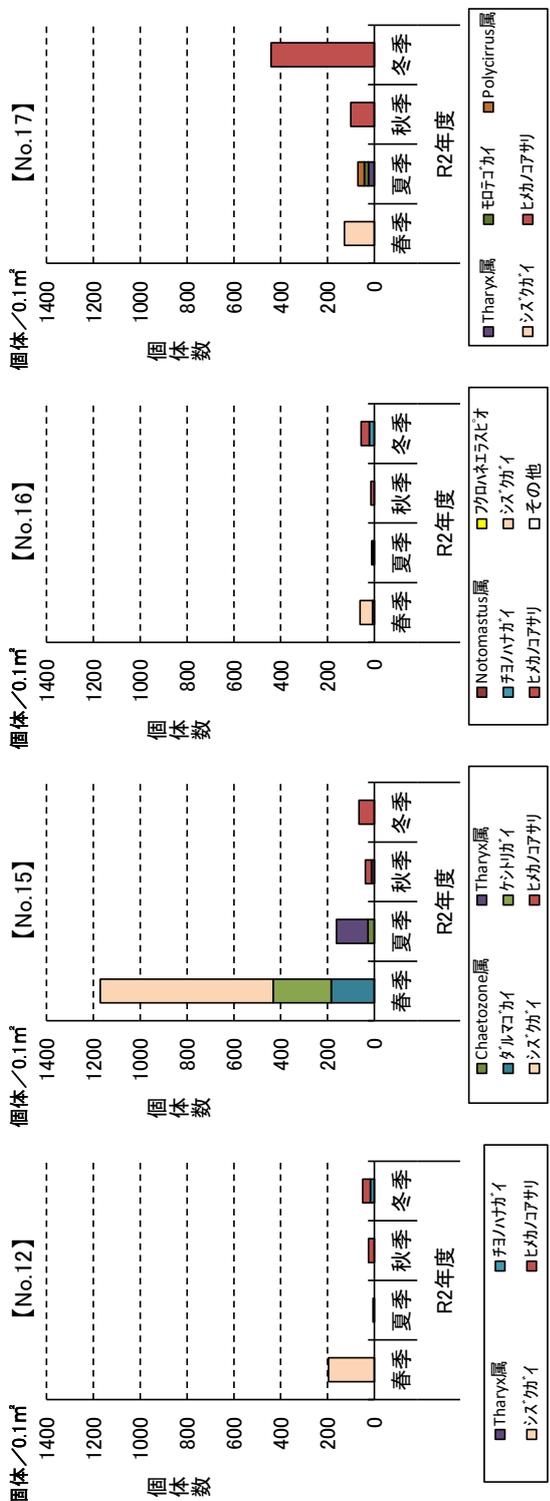
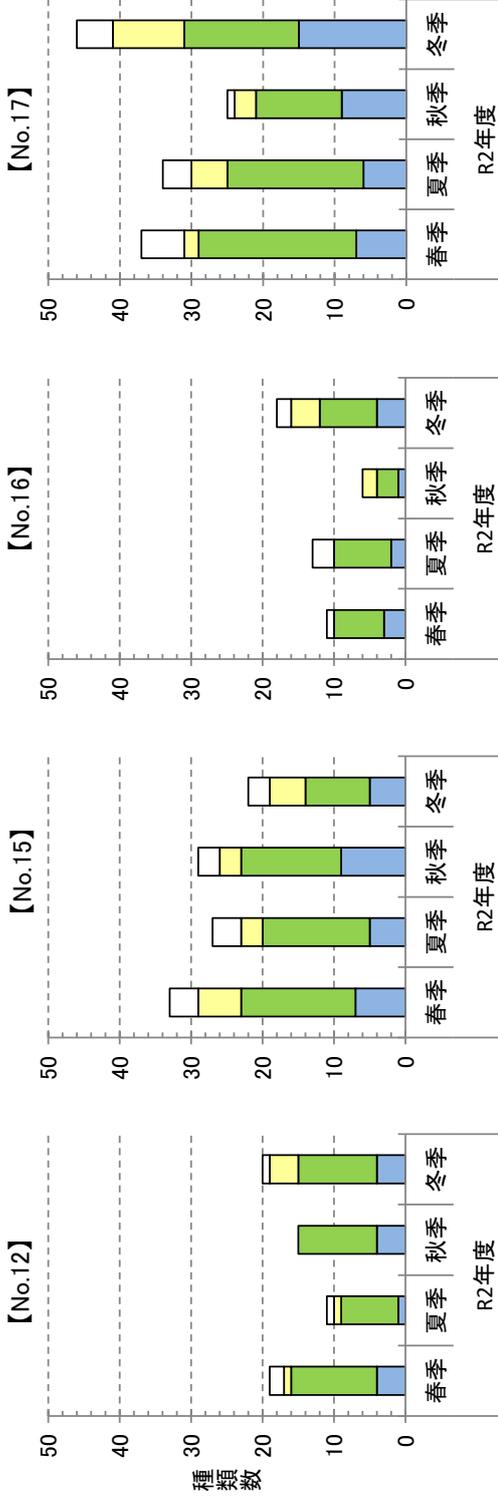
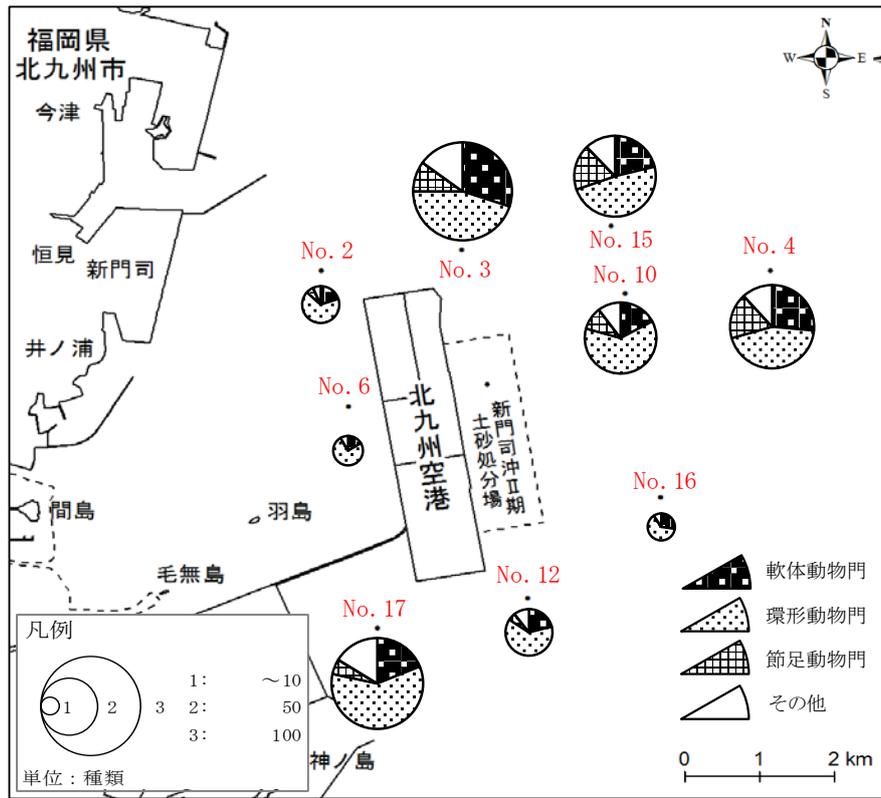


図 2.2.32(2) 底生生物の季節変化 (調査地点別)

種類数
 調査年月日：令和2年5月26日（春季）
 調査方法：軽量簡易グラブ採泥器による採泥



個体数
 調査年月日：令和2年5月26日（春季）
 調査方法：軽量簡易グラブ採泥器による採泥

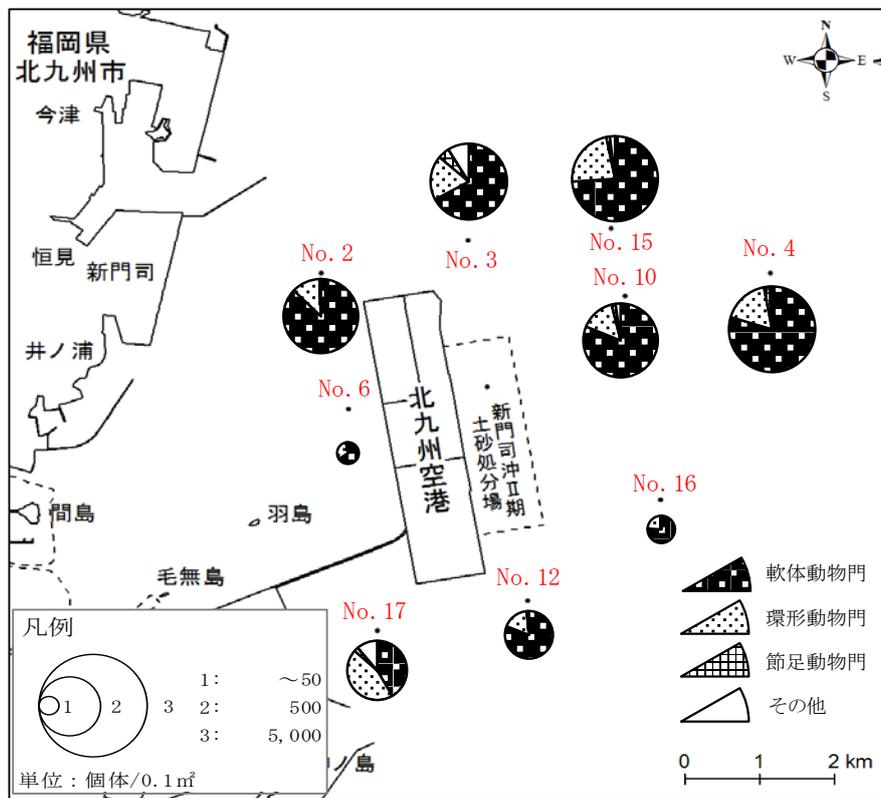


図 2. 2. 33(1) 底生生物の水平分布（令和2年度春季：種類数・個体数）

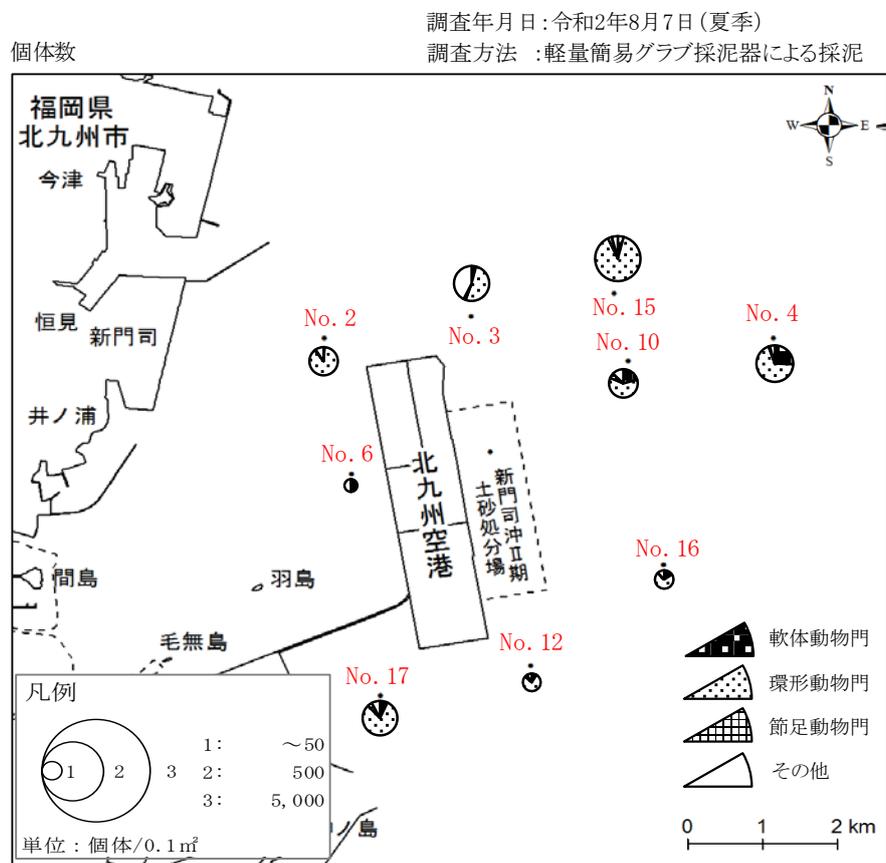
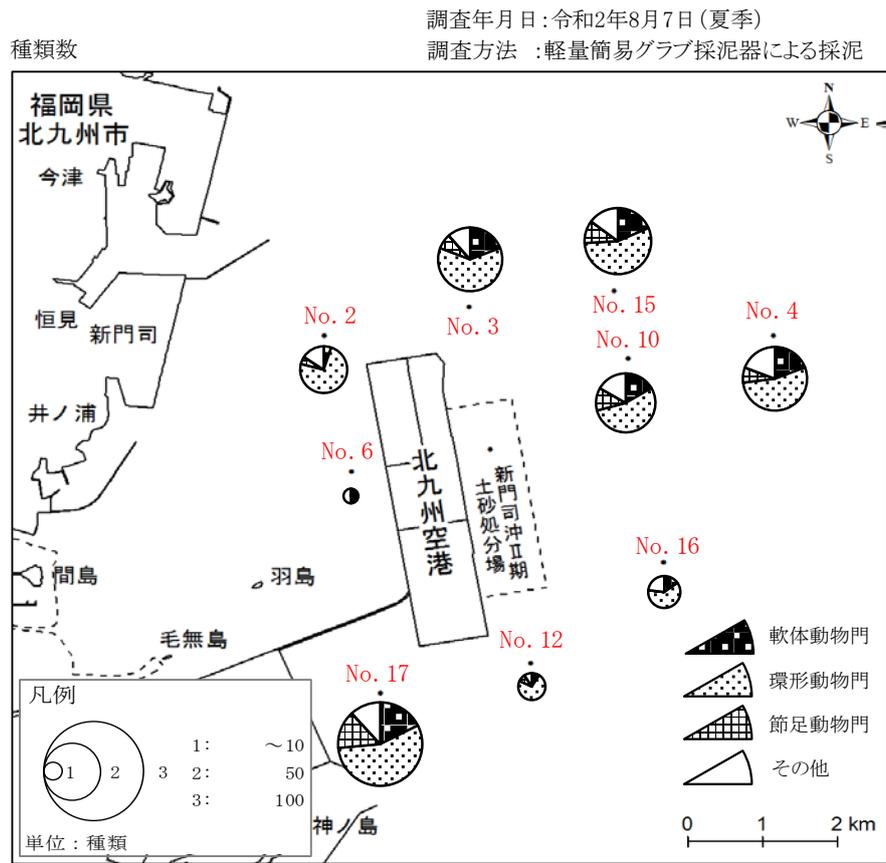
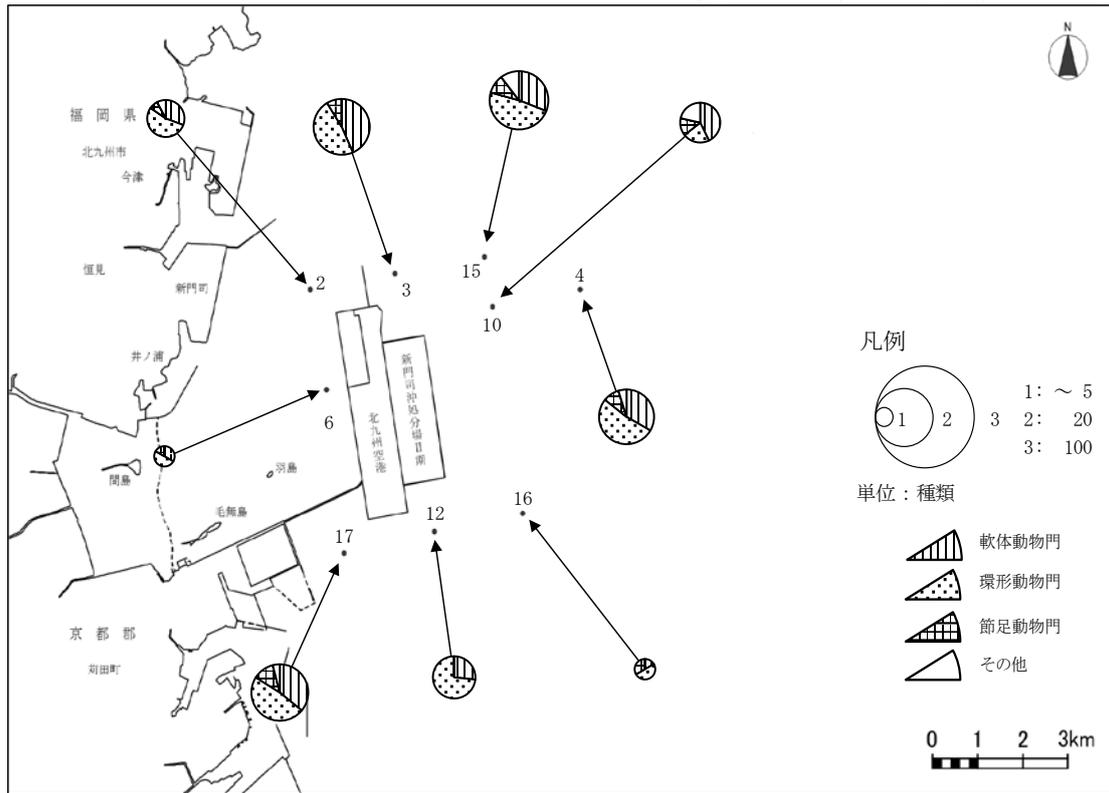


図 2.2.33 (2) 底生生物の水平分布 (令和2年度夏季:種類数・個体数)

種類数

調査期日:令和 2年11月19日(秋季)

調査方法:スミス・マッキンタイヤ型採泥器による3回採泥



個体数

調査期日:令和 2年11月19日(秋季)

調査方法:スミス・マッキンタイヤ型採泥器による3回採泥

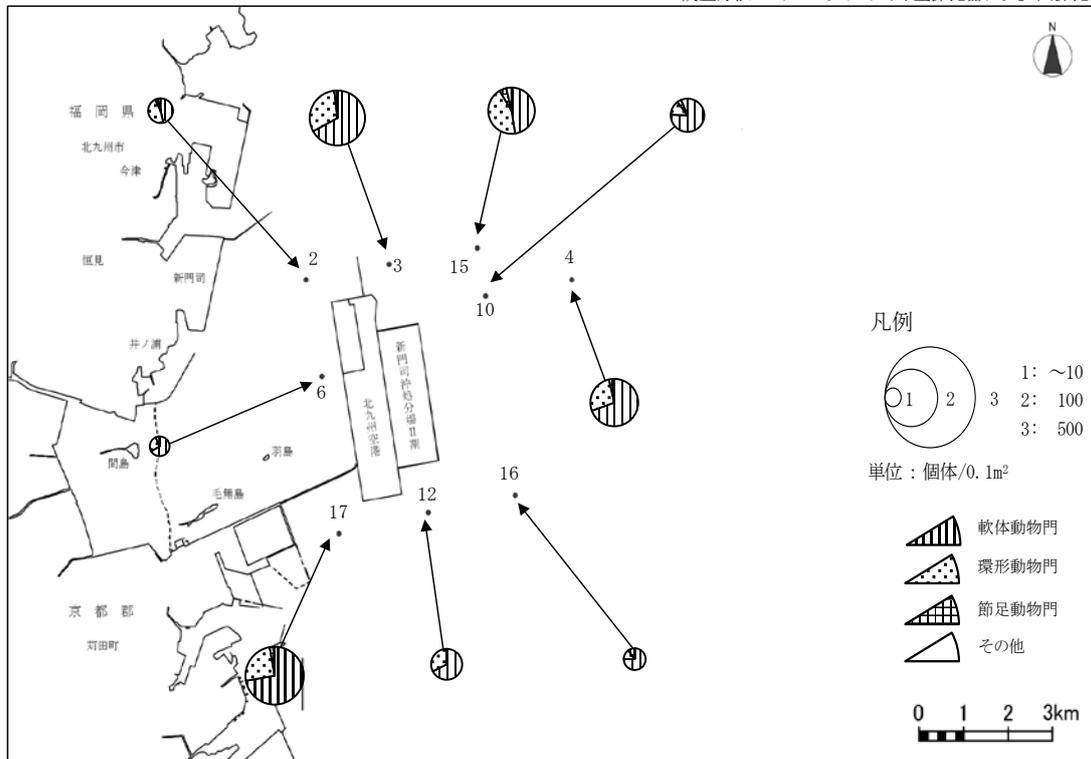
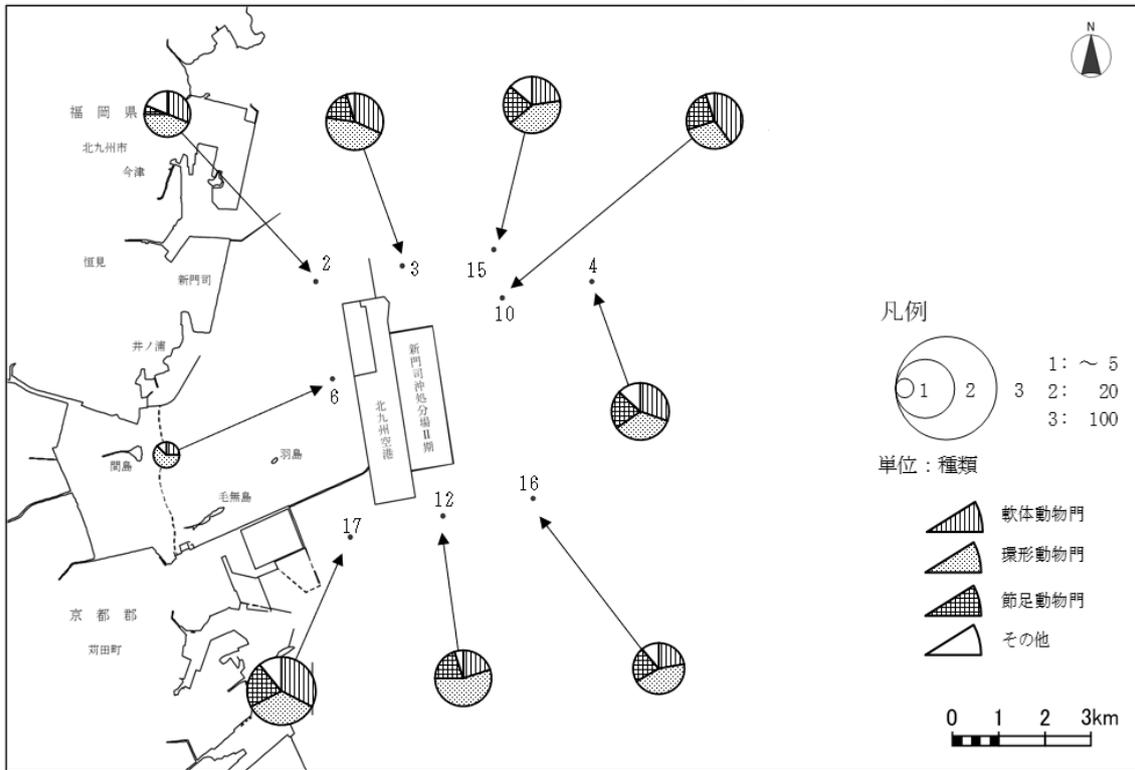


図 2.2.33 (3) 底生生物の水平分布 (令和 2 年度秋季:種類数・個体数)

種類数

調査期日: 令和3年1月20日(冬季)
調査方法: スミス・マッキンタイヤ型採泥器による3回採泥



個体数

調査期日: 令和3年1月20日(冬季)
調査方法: スミス・マッキンタイヤ型採泥器による3回採泥

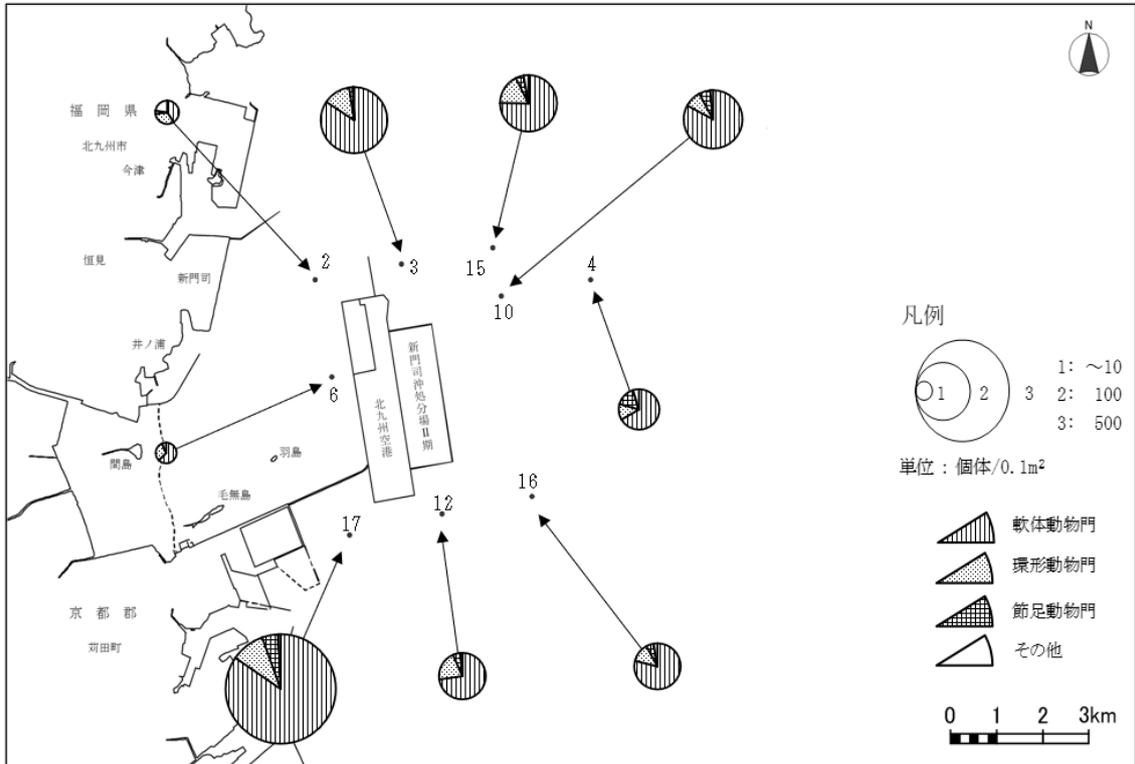


図 2.2.33 (4) 底生生物の水平分布 (令和2年度冬季: 種類数・個体数)

(2) 評価

一般に、底生生物の多くは基底面を匍匐移動するものを除き、移動性が極めて小さいため、その場における生息環境の影響を強く受ける。従って、ここでは過年度から調査を継続している4地点について、調査地点別に経年変化の傾向を検討した(図2.2.34参照)。

●No. 2

最近5ヶ年における各季の種類数は2~30種類の範囲で推移し、各季とも調査年度によりばらつきがみられた。門別には、春季、夏季、秋季ではおおむね環形動物門の割合が最も高く、次いで軟体動物門、節足動物門の順であった。冬季は軟体動物門の割合が最も高かった。

個体数は、春季に多く、夏季と秋季に少ない傾向がみられ、平成28年度春季と令和2年度春季ではシズクガイが多く出現した。

主な出現種は、春季は二枚貝綱のシズクガイ、夏季と秋季はヒメカノコアサリ、冬季はシズクガイ、ヒメカノコアサリ、甲殻綱のレウコン属であった。

令和2年度の結果は、春季にシズクガイが多く出現したが、平成28年度春季と同様であり、夏季、秋季及び冬季も過年度と同様な傾向であり大きな変化はみられなかった。

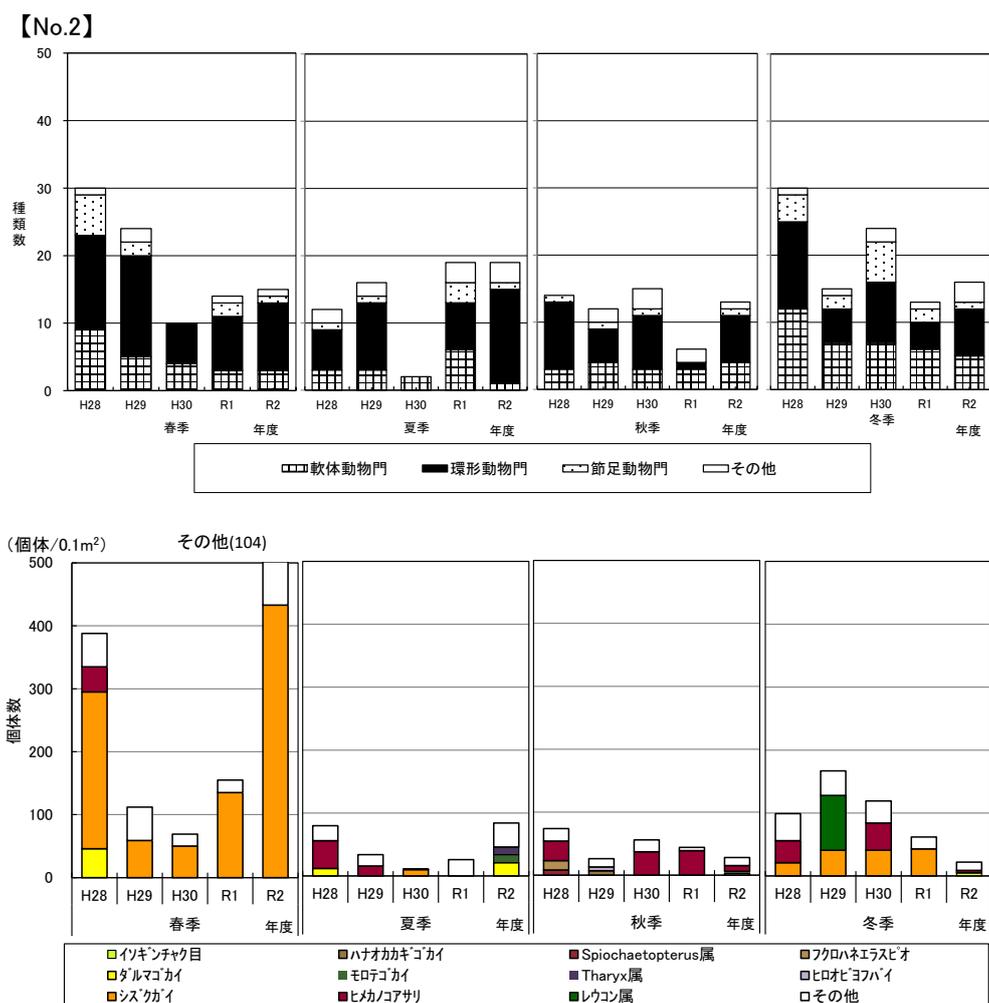


図 2.2.34(1) 底生生物の経年変化 (No. 2)

●No. 3

最近5ヶ年における種類数は11～46種類の範囲で推移し、春季と冬季にやや多かった。門別には、各季とも概ね環形動物門の割合が最も高く、次いで軟体動物門、節足動物門の順であった。

個体数は、調査年によるばらつきはあるものの、概ね春季と冬季に多い傾向がみられた。

主な出現種は、春季は二枚貝綱のシズクガイ・ヒメカノコアサリ・ケシトリガイ等であり、夏季、秋季及び冬季はヒメカノコアサリや半索動物門のギボシムシ綱等であった。

令和2年度の結果は、過年度と同様な傾向であり大きな変化はみられないが、夏季においてはギボシムシ綱がみられた。

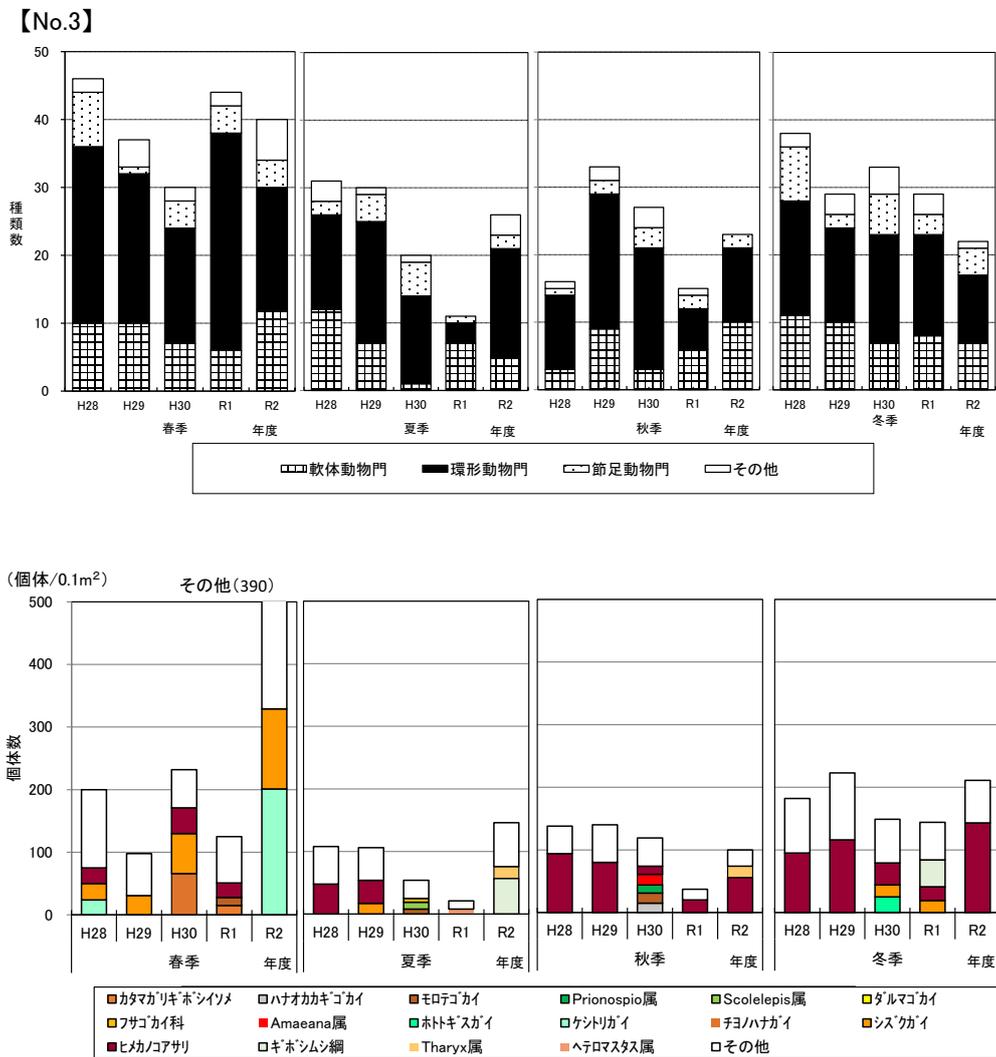


図 2.2.34(2) 底生生物の経年変化 (No. 3)

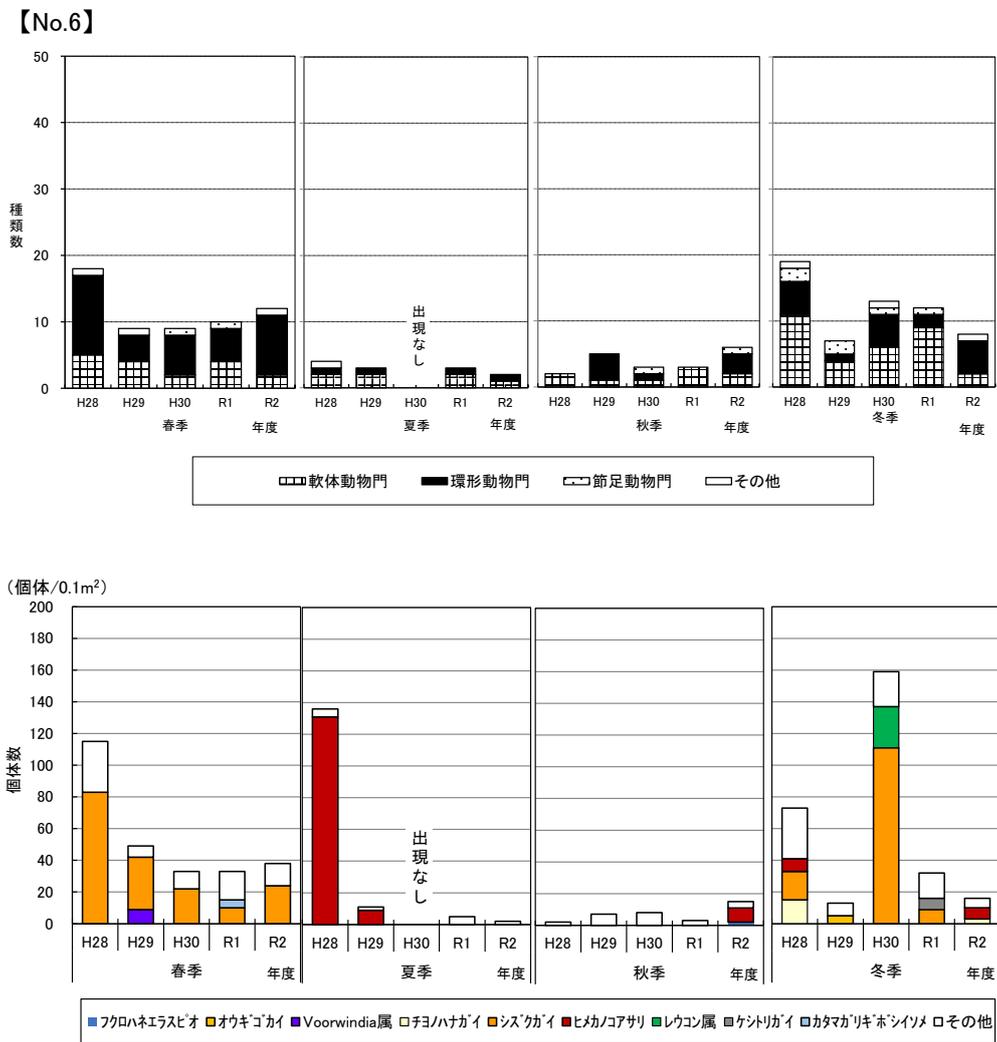
●No. 6

最近5ヶ年における種類数は0～19種類の範囲で推移し、その他の地点に比べてやや少ないが、季節的には春季と冬季にやや多かった。門別には、春季は環形動物門の割合が最も高いが、夏季から冬季にかけては軟体動物門が多かった。

個体数は、調査年によるばらつきはあるものの、概ね春季と冬季に多い傾向がみられ、平成28年度夏季ではヒメカノコアサリが131個体/0.1 m²、平成30年度冬季ではシズクガイが111個体/0.1 m²と特に多く出現した。

主な出現種は、春季と冬季は二枚貝綱のシズクガイ、夏季は二枚貝綱のヒメカノコアサリが多く出現した。

令和2年度の結果は、概ね過年度と同様な傾向であり大きな変化はみられなかった。



●No. 12

最近5ヶ年における種類数は、1～27種類の範囲で推移し、春季と冬季にやや多かった。門別には、春季～秋季は環形動物門の割合が最も高かったが、冬季は軟体動物門が多かった。

個体数は、調査年によるばらつきはあるものの、概ね春季と冬季に多い傾向がみられたが、平成28年度夏季及び冬季ではヒメカノコアサリが95個体/0.1 m²、111個体/0.1 m²、令和2年度春季ではシズクガイが196個体/0.1 m²と特に多く出現した。

主な出現種は、春季は二枚貝綱のシズクガイ、その他の時期は二枚貝綱のヒメカノコアサリが比較的多く出現した。

令和2年度の結果は、春季にシズクガイが例年よりやや多く出現した以外は、過年度と同様な傾向であり大きな変化はみられなかった。

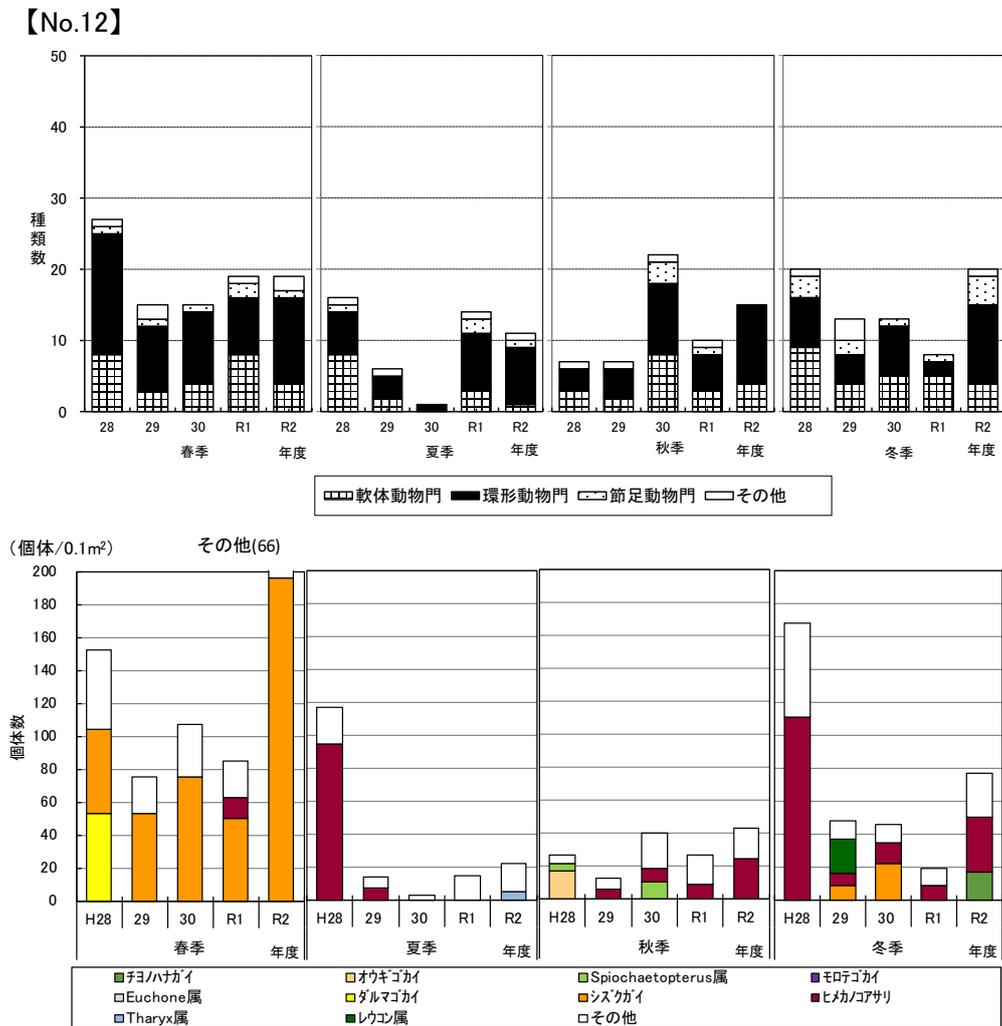


図 2.2.34(4) 底生生物の経年変化 (No. 12)

●底生生物調査結果のまとめ

令和2年度の種類数、個体数は春季に多い傾向であった。個体数からみた主な出現種は、シズクガイやヒメカノコアサリであった。

最近5ヶ年間の傾向をみると、種類数、個体数とも調査年度、調査地点によって多少差はあるものの、概ね春季と冬季に多く、夏季と秋季に少ない傾向がみられた。特に空港西側のNo. 6で少ない傾向にあった。

本調査海域の底質は概ね軟泥質であり、一般的には底生生物の種類数、個体数が少ない海域である。このような海域では、夏季に成層が強まる時期には、海底付近の溶存酸素量が低下しやすく、底質環境が悪化しやすいことが知られている。過年度の調査結果でも夏季の種類数、個体数が少なく、内湾における一般的な出現傾向となっていると考えられた。なお、当該水質調査においては、夏季調査においても貧酸素の傾向は認められなかった。

また、主な出現種は、泥質に生息するシズクガイ、チヨノハナガイ等の汚濁指標種や砂泥質に多いヒメカノコアサリ等であり、内湾で普通にみられる種であった。